

ISSN 2759-6591

東日本大震災・原子力災害伝承館

The Great East Japan Earthquake and Nuclear Disaster Memorial Museum

年次報告書（令和5年度）



館長挨拶



東日本大震災・原子力災害伝承館は、2011年の東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故という未曾有の複合災害の記録と記憶を防災、減災の教訓として国内外に発信し、未来につなぐことを目的として、2020年（令和2年）9月に開館しました。

開館以来、新型コロナウイルス感染症の状況に左右される環境でしたが、令和5年度は伝承館として初めて平時に近い状態での営業となり、来館者数は9万人を超え、開館以来の来館者数も約28万人を数えることとなりました。このような進展は関係者の皆様の継続的なご支援の賜物であると、改めて感謝申し上げます。

令和5年度は、企画展として前半に「モノが語る原子力災害」を、そして後半に「人が語る原子力災害」を行いました。伝承館が保管する現物資料の特別展示や、新たな証言の収集・展示、理解を深めるための解説パネルなど、企画展示は報道機関においても高い評価をいただきました。このような企画展を今後も継続して行っていきたいと考えています。

また県外での出張展示として、令和5年度は人と防災未来センター出張展「東日本大震災と福島の経験を伝える」（神戸市）、日本科学未来館出張展「東日本大震災にみる地球の動きと災害」（東京都・江東区）など大きな会場でテーマに沿った展示を行いました。来年度は初の海外での出張展示も予定しており、より一層伝承館の知名度アップを図っていききたいと考えています。

研究事業については、5名の常任研究員が上級研究員の指導の下、学会発表や論文執筆によってそれぞれの研究成果を着々と公表しており、外部資金も2件獲得しました。今年度から研究事業が本格的に始動する福島国際研究教育機構（F-REI）との連携においても、長崎大学や東京大学、福井大学などと協力しながら、原子力災害医療科学や大規模災害とデータサイエンスなどにおける研究の今後のさらなる発展が期待されるところです。

伝承館には「福島」だからできる役割があると思います。福島を経験を次世代や国内外に伝えていくという大きなミッションは開館以来、変わりません。伝承館において、世界中の方が複合災害の教訓を学び、復興の大切さを学ぶことができる場とすべく、スタッフ一同、今後もさらなる努力を続けていきたいと考えています。

令和6年9月

東日本大震災・原子力災害伝承館 館長 高村 昇

東日本大震災・原子力災害伝承館の“基本理念”と “基本理念に基づいた4事業の実施”

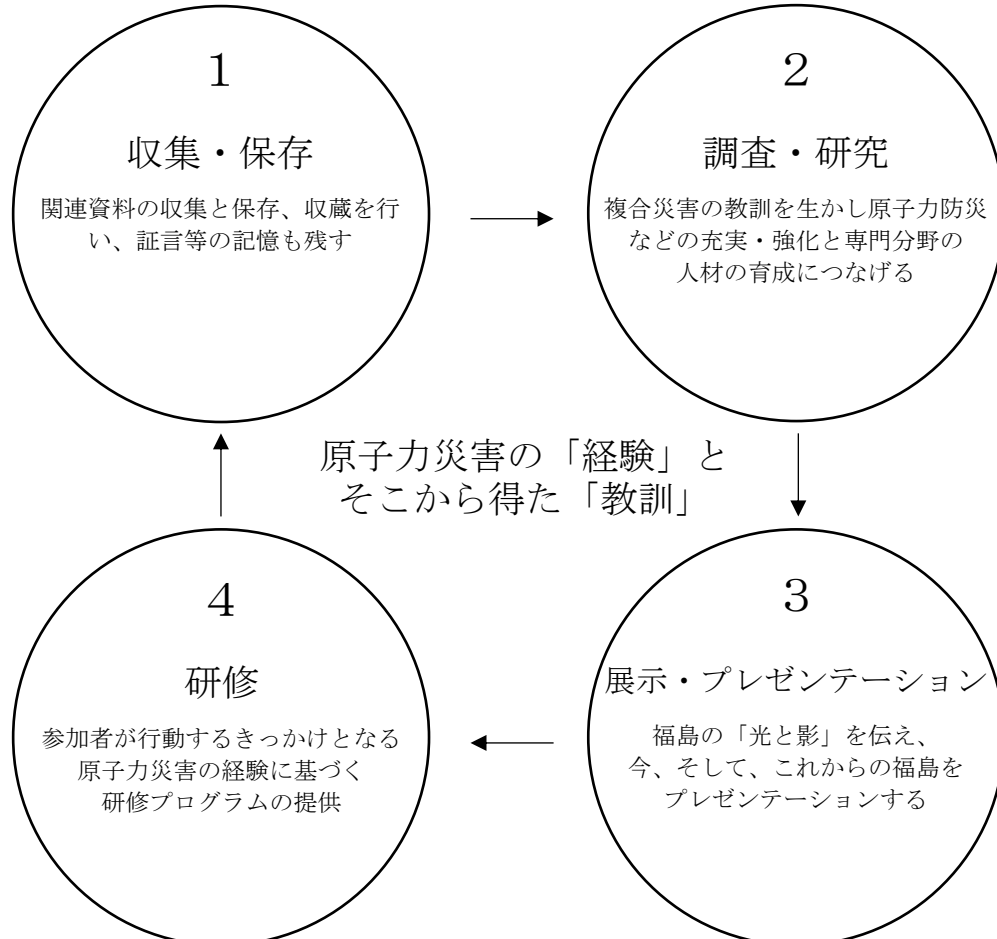
基本理念

世界初の甚大な複合災害の記録や教訓と、そこから着実に復興する過程を収集・保存・研究し、風化させず後世に継承・発信し、世界と共有することは被災した人々の共通の想いである。

東日本大震災・原子力災害伝承館では、特に福島だけが経験した原子力災害をしっかりと伝えるために、次の3つの基本理念を掲げる。

1	原子力災害と復興の記録や教訓の 未来への継承・世界との共有
2	福島にしかない経験や教訓を生かす 防災・減災
3	福島に心を寄せる人々や団体と連携し、 地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等による 復興の加速化への寄与

基本理念に基づいた4事業の実施



施設概要

1. 施設の概要

設置者	福島県
管理運営	公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構が福島県から指定管理を受託。
施設の設置場所	〒979-1401 福島県双葉郡双葉町大字中野字高田 39
開館日	令和2年9月20日
開館時間	午前9時から午後5時（午後4時30分最終入館）
休館日	火曜日（火曜祝日の場合は翌平日）・年末年始（12/29～1/3）
入館料	大人：600円、小中高：300円、未就学児：無料 大人団体（20名以上）：480円、小中高団体（20名以上）：240円
延べ床面積	延床面積5,256.56㎡ （1F：約2,675㎡、2F：約2,385㎡、3F：約195㎡）
構造・規模	地上3階、鉄筋コンクリート構造（一部鉄骨造）
駐車場利用可能台数	大型バス：10台、普通車：111台

2. 設置目的

地方自治法第244条第1項の規定に基づき、東日本大震災における甚大な災害に見舞われた福島県の記録、教訓及び復興のあゆみを着実に進める過程の資料を収集、保存及び研究し、決して風化させることなく後世に引き継ぎ、国内外と共有するとともに、福島イノベーション・コースト構想の推進及び本県の復興の加速化に寄与するため、東日本大震災・原子力災害伝承館を設置する。（東日本大震災・原子力災害伝承館条例第1条）

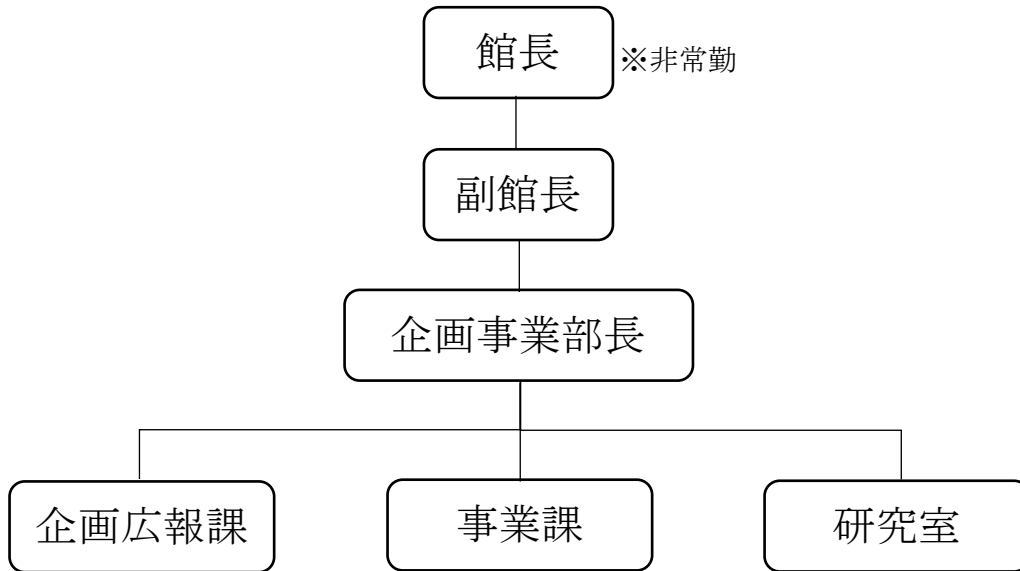
3. 施設沿革

平成27年3月31日	国の「イノベーション・コースト構想個別検討会」の中間整理において、福島県でのアーカイブ拠点に関する研究会の立ち上げを指示
平成27年4月～8月	福島県において「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設有識者会議」を設置、当該会議を5回開催〔施設の必要性の有無を検討〕
平成27年9月	本有識者会議において報告書をまとめ、福島県知事へ提出
平成28年6月～12月	福島県において「拠点施設基本構想策定に係る検討会議(4回)」を実施〔施設の具体的な規模や機能、立地場所等を検討〕
平成29年3月27日	福島県の「新生ふくしま復興推進本部会議」において「拠点施設基本構想」を決定〔立地場所や基本理念、展示ストーリー等〕
平成30年4月25日	福島復興特措法に基づく「重点推進計画」に認定〔施設の管理運営は、指定管理者制度に基づく福島イノベ機構での運営を検討すると明記〕
令和2年9月20日	東日本大震災・原子力災害伝承館 開館

4. 組織体制

令和6年3月31日現在、東日本大震災・原子力災害伝承館の構成員は、以下のとおり館長、副館長、企画事業部長、研究室及び各課の構成員を合わせた32名である。

また、受付は、外部委託のスタッフで運営している。



企画広報課	事業課	研究室
企画広報課担当課長 1名 課長代理（誘客） 1名 チーフ（アテンダント） 1名 課員 9名 ※非常勤含む	事業課長 1名 課長代理 1名 課員 7名	上級研究員 3名※非常勤 常任研究員 5名

東日本大震災・原子力災害伝承館 年次報告書 目次

- ・ 館長挨拶
- ・ 東日本大震災・原子力災害伝承館の“基本理念”と“基本理念に基づいた4事業の実施”
- ・ 施設概要

1章 利用者状況	1
1節 来館者数	2
2節 学校団体来館者数	3
3節 来館者アンケートの概要	5
4節 V I P等の視察対応	8
2章 展示	9
1節 常設展示	10
2節 企画展示	13
3節 出張展示	15
4節 エントランス展示	18
3章 資料収集・保存	31
1節 資料収集・保存・収蔵	32
2節 資料閲覧室	35
4章 語り部	37
1節 館内語り部講話	38
2節 館外での語り部講話、交流	40
5章 研修	43
1節 一般研修	44
2節 専門研修	45
6章 調査・研究	49
1節 概要	50
2節 常任研究員の取組	51
3節 報告会等	67
4節 福島国際研究教育機構（F-REI）との連携	69
5節 その他	70
7章 イベント・広報	71
1節 イベント	72
2節 広報	77
8章 東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会	79
1節 東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会	80
9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事	81

1章 利用者状況

1節 来館者数

来館者数の推移

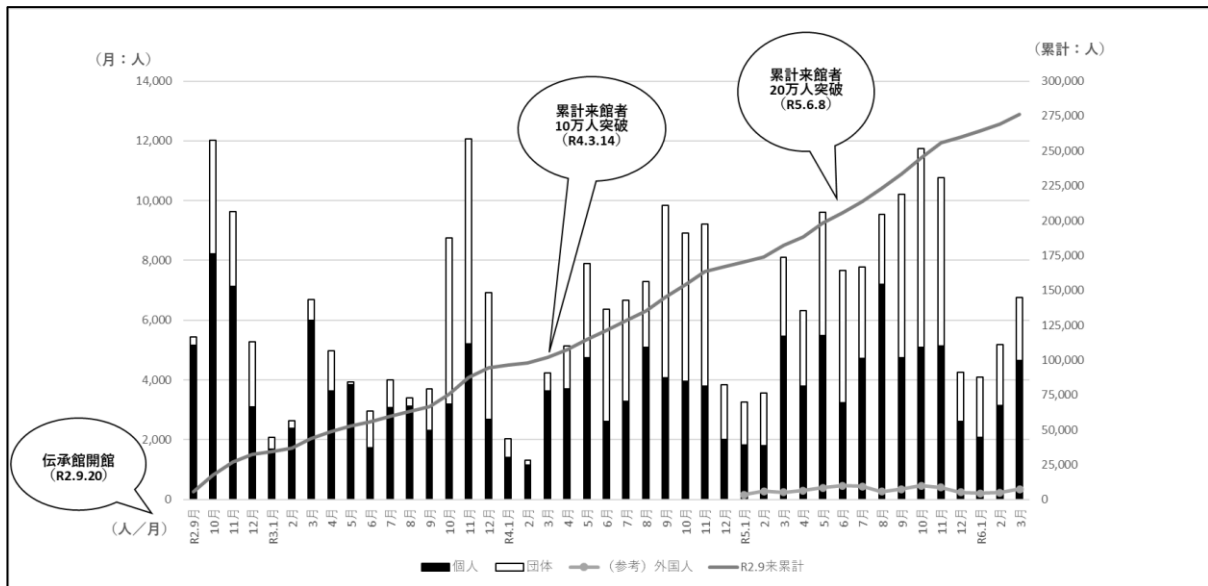
令和2年（2020）年9月20日 東日本大震災・原子力災害伝承館 開館

令和4年（2022）年3月14日 累計来館者10万人到達

令和5年（2023）年6月8日 累計来館者20万人到達

開館日数

令和5年度：307日



令和5年度

(単位：人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
個人	3,805	5,479	3,233	4,729	7,205	4,755	5,097	5,130	2,619	2,079	3,152	4,658	51,941
団体	2,523	4,136	4,248	3,040	2,334	5,454	6,652	5,631	1,642	2,021	2,040	2,097	41,818
合計	6,328	9,615	7,481	7,769	9,539	10,209	11,749	10,761	4,261	4,100	5,192	6,755	93,759

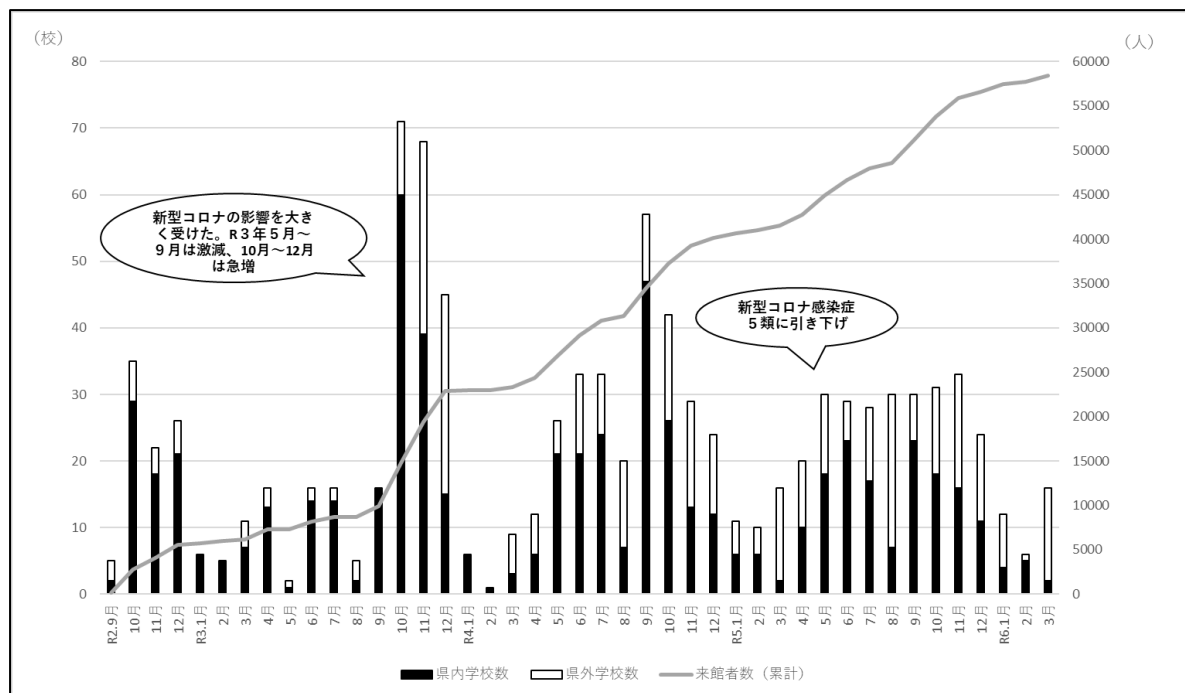
年度別来館者数

(単位：人)

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	合計
個人	33,653	34,978	42,346	51,941	162,918
団体	10,097	23,293	37,773	41,818	112,981
合計	43,750	58,271	80,119	93,759	275,899

2節 学校団体来館者数

学校団体数及び学校団体来館者数



令和5年度学校団体数及び学校団体来館者数

（来館者数単位：人）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	20	30	29	28	30	30	31	33	24	12	6	16	289
県内	10	18	23	17	7	23	18	16	11	4	5	2	154
県外	10	12	6	11	23	7	13	17	13	8	1	14	135
来館者数	1,194	2,181	1,736	1,312	615	2,525	2,676	2,050	705	938	270	622	16,824

年度別学校団体数及び学校団体来館者数

（来館者数単位：人）

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	合計
学校団体数	110	269	313	289	981
県内	88	184	191	154	517
県外	22	87	122	135	366
来館者数	6,182	17,105	18,277	16,824	58,388

1章 利用者状況

令和4年度学校団体数及び学校団体来館者数

(来館者数単位:人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	12	26	33	33	20	57	42	29	24	11	10	16	313
県内	6	21	21	24	7	47	26	13	12	6	6	2	191
県外	6	5	12	9	13	10	16	16	12	5	4	14	122
来館者数	1,097	2,380	2,376	1,649	539	3,181	2,735	1,996	889	507	402	526	18,277
県内	665	1,841	849	1,307	127	2,754	1,682	1,198	406	216	273	26	11,344
県外	432	539	1,527	342	412	427	1,053	798	483	291	129	500	6,933

令和3年度学校団体数及び学校団体来館者数

(来館者数単位:人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	16	2	16	14	5	16	71	68	45	6	1	9	269
県内	13	1	14	13	2	16	60	39	15	6	1	3	183
県外	3	1	2	1	3	0	11	29	30	0	0	6	86
来館者数	1,104	5	888	485	50	1,180	4,929	4,602	3,440	104	17	301	17,105
県内	817	2	565	461	34	1,180	4,403	1,780	1,027	104	17	139	10,529
県外	287	3	323	24	16	0	526	2,822	2,413	0	0	162	6,576

※ 令和4年度年次報告書に掲載の「令和3年度月別学校団体数及び学校団体来館者数」に誤りがありました。正しくは上記の表になります。お詫びして訂正します。

令和2年度学校団体数及び学校団体来館者数

(来館者数単位:人)

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	5	35	22	26	6	5	11	110
県内	2	29	18	21	6	5	7	88
県外	3	6	4	5	0	0	4	22
来館者数	146	2,659	1,252	1,529	169	210	217	6,182
県内	72	1,956	870	1,028	169	210	118	4,423
県外	74	703	382	501	0	0	99	1,759

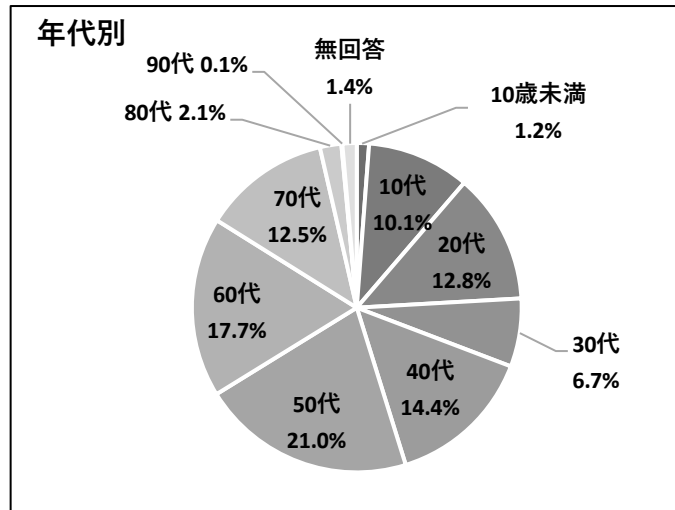
3節 来館者アンケートの概要

来館者の属性や施設の評価を把握するため、館内にアンケート用紙と記入台を設置し、一般来館者のアンケートを実施した。

- ・ 回答数：6,513 件
- ・ 期間：令和5年4月1日～令和6年3月31日

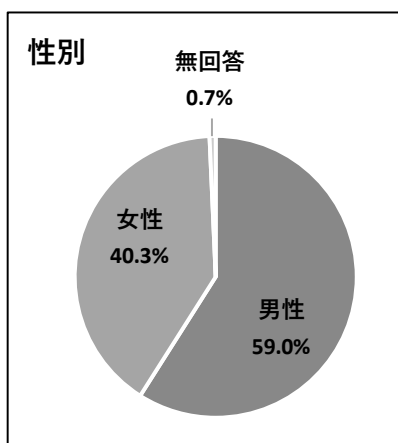
年代別

年代	回答数	構成比
0-9	81	1.2%
10-19	660	10.1%
20-29	833	12.8%
30-39	437	6.7%
40-49	941	14.4%
50-59	1369	21.0%
60-69	1156	17.7%
70-79	817	12.5%
80-89	140	2.1%
90-99	6	0.1%
無回答	73	1.4%
総計	6,513	100.0%



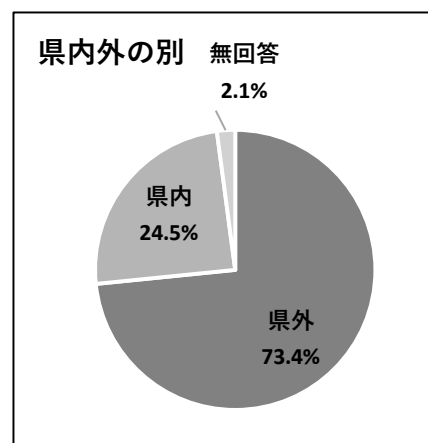
性別

	回答数	構成比
男性	3,841	59.0%
女性	2,624	40.3%
無回答	48	0.7%
総計	6,513	100.0%



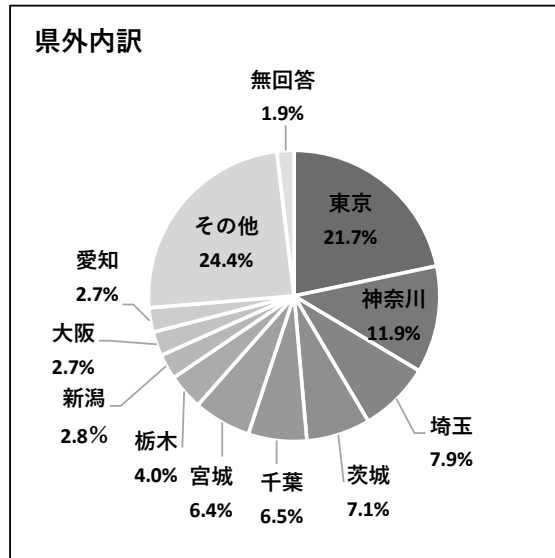
県内外の別

		回答数	構成比	構成比
県外	国内	4,756	73.1%	73.4%
	海外	21	0.3%	
県内		1,598	24.5%	24.5%
無回答		138	2.1%	2.1%
総計		6,513	100.0%	100.0%



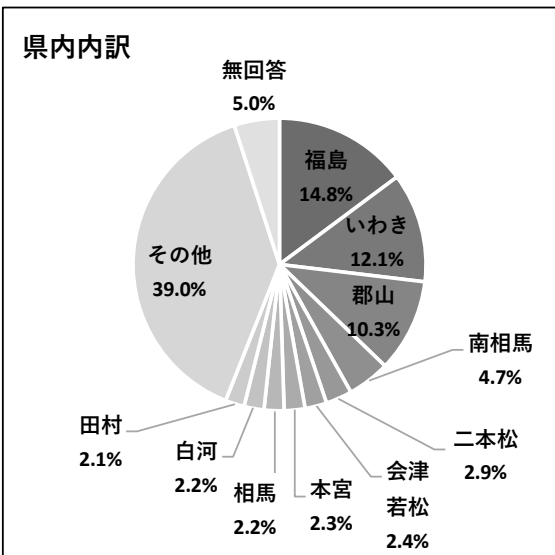
県外内訳

順位	県別	人数	構成比
1	東京都	1,037	21.7%
2	神奈川県	567	11.9%
3	埼玉県	377	7.9%
4	茨城県	339	7.1%
5	千葉県	311	6.5%
6	宮城県	305	6.4%
7	栃木県	191	4.0%
8	新潟県	136	2.8%
9	大阪府	127	2.7%
10	愛知県	127	2.7%
	その他	1,171	24.4%
	無回答	89	1.9%
	合計	6,513	100.0%



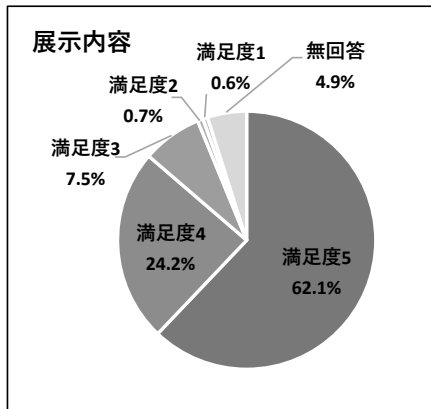
県内内訳

順位	自治体別	人数	構成比
1	福島市	302	14.8%
2	いわき市	247	12.1%
3	郡山市	211	10.3%
4	南相馬市	96	4.7%
5	二本松市	60	2.9%
6	会津若松市	50	2.4%
7	本宮市	48	2.3%
8	相馬市	45	2.2%
9	白河市	44	2.2%
10	田村市	43	2.1%
	その他	797	39.0%
	無回答	103	5.0%
	合計	6,513	100.0%



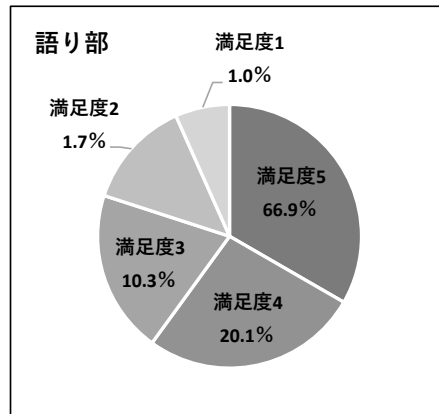
展示内容 満足度

満足度	回答数	構成比
5	4,046	62.1%
4	1,576	24.2%
3	489	7.5%
2	47	0.7%
1	36	0.6%
無回答	319	4.9%
総計	6,513	100.0%



語り部 満足度

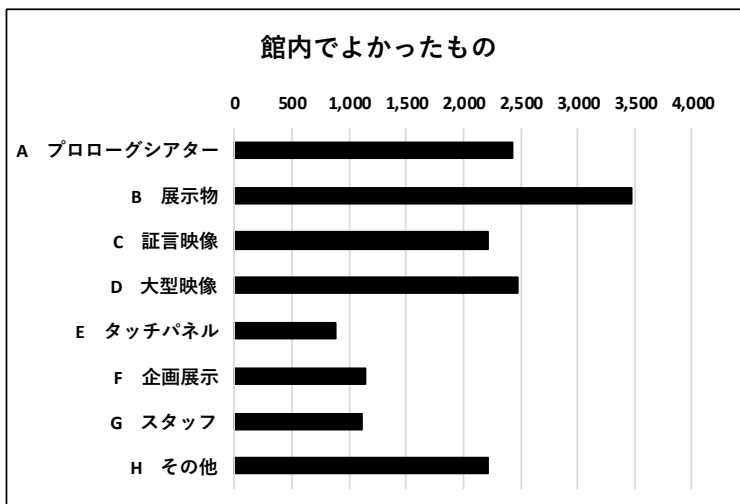
満足度	回答数	構成比
5	3,266	66.9%
4	981	20.1%
3	500	10.3%
2	84	1.7%
1	47	1.0%
総計	6,513	100.0%



館内でよかったもの

A プロローグシアター	2,433
B 展示物	3,473
C 証言映像	2,221
D 大型映像	2,469
E タッチパネル	879
F 企画展示	1,137
G スタッフ	1,106
H その他	2,215

※複数回答可



4節 VIP等の視察対応

伝承館では、政府、地方自治体、海外の要人などの視察を積極的に受け入れており、館長または副館長が対応している。

令和5年度の視察受け入れ実績は、57件、604人であった。

区分	件	人	主な団体等
政府関係者	17件	132人	・環境省副大臣（10/7） ・復興庁副大臣（10/22）
海外要人等	13件	132人	・ドイツ環境大臣（4/13） ・フランスHCTISN委員長（4/27） ・IAEA（国際原子力機関）（5/10）
地方自治体関係者	8件	138人	・上越市長（11/25） ・東北六県企画担当部長会議（1/17）
民間企業幹部等	19件	202人	・長崎大学原爆後障害医療研究所所長（7/7） ・トヨタモビリティパーツ 3部長会（9/4） ・東北新聞部長会（11/10）
合計	57件	604人	

※ 随行者を含む



ドイツ環境大臣

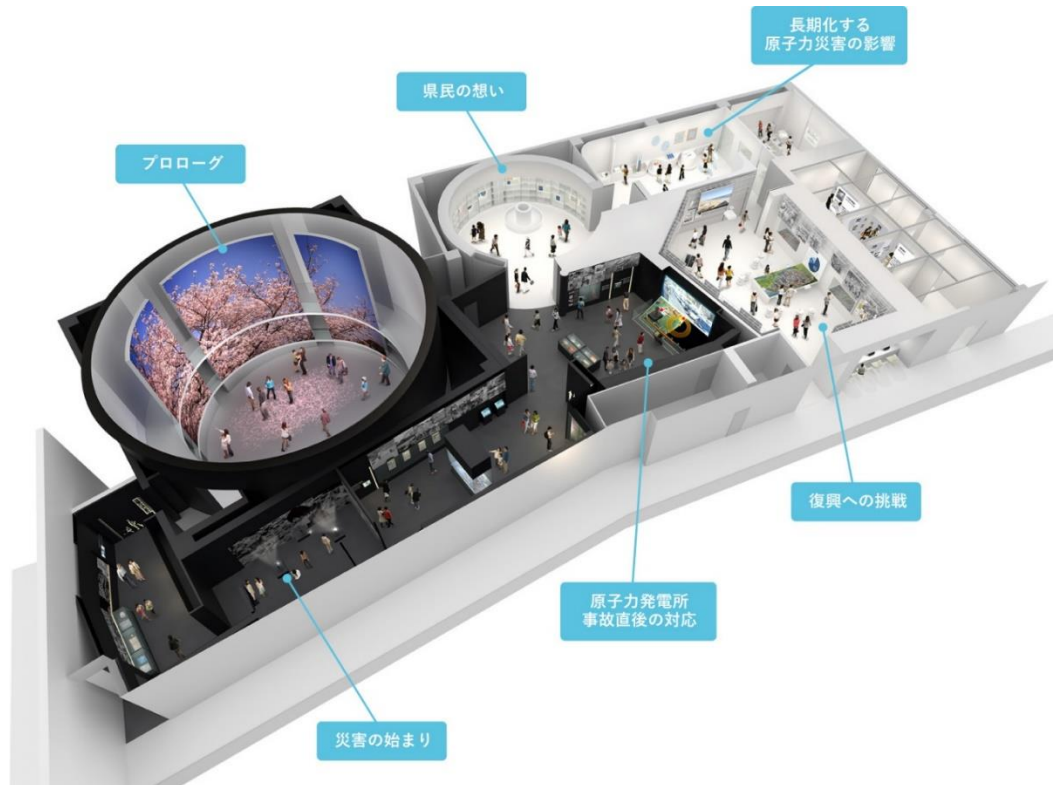


IAEA（国際原子力機関）

2章 展示

1節 常設展示

1. 展示資料



(東日本大震災・原子力災害伝承館 展示室全体像)

(1) プロローグ

原子力発電所建設当時の様子や地震・津波、そして原発事故発生から住民避難、復興や廃炉に向けた取組みについて、床面を含めた映像を上映している。



(2) 災害の始まり

事故前・事故発生時・事故直後の経過を「事故前の暮らし」「東日本大震災～地震と津波の記録～」「原子力発電所事故の発生」「災害対策本部の記録」として時系列でたどり、原子力災害の始まりを克明に、臨場感と共に展示している。

(3) 原子力発電所事故直後の対応

これまで経験したことのない原子力発電所事故発生直後の状況やその特殊性を、様々な資料や証言等をもとに振り返ります。錯綜する情報、転々とする避難生活、国内外の反応と支援を、「避難の開始」「県内に広がる不安」「国内外の反応と支援」に分けて展示している。



(4) 県民の想い

震災前の平穏な「ふるさとの日常」と、その「日常」が原発事故を機にどのように変わってしまったのか、県民の様々な想いを「災害時に感じた不安・恐れ」「学校生活の思い出・変化」「家族や地域生活との別れ・変化」「生活基盤の変化・将来への想い」という4つのコーナーに分け、証言映像と思い出の品等の実物展示を組み合わせで展示している。

(5) 長期化する原子力災害の影響

長期化した原子力災害について、資料や専門家による解説映像等を通して学ぶことができます。「除染」「風評の払拭」「長期避難への対応」「健康に関する取り組み」の4つのテーマを展示している。



(6) 復興への挑戦

困難を乗り越え復興に挑戦する福島県の姿を紹介している。「復興のあゆみ」「廃炉の今」「みらいのまち」「福島イノベーション・コースト構想の取り組み」、そして、「県民によるチャレンジ」を発信することで、県内の他施設、地域への回遊を促すとともに、まちづくり体験等により、来館者の方々に福島県の未来について考えるきっかけを作っている。

2. 展示更新

令和6年2月19日～2月22日を臨時休館とし、常設展示室の更新を行った。

(1) プロローグシアター映像の日本語・英語字幕追加



(2) 第4ゾーン「除染コーナー」の改修



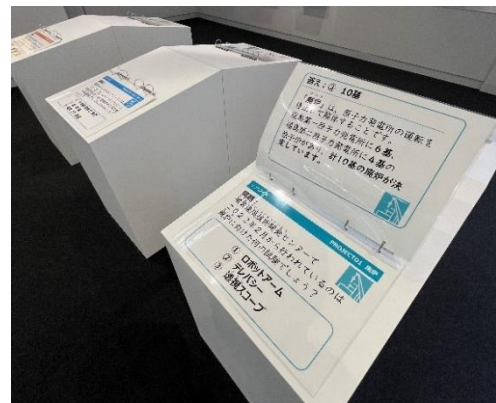
(3) タッチパネルコンテンツ動画の英語版制作

(4) タッチパネルコンテンツの情報更新

(5) 第5ゾーン「福島イノベーション・コースト構想の取り組み」に災害用ロボット「MISORA」を展示及びイノベーション・コースト構想に関するクイズコーナーを設置



MISORA



クイズコーナー

2節 企画展示

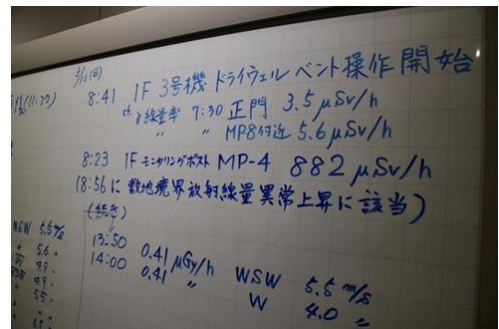
令和5年度の企画展は、福島県が経験し、現在進行形の原子力災害について、「モノ」と「人」という異なる切り口で展示することで、原子力災害により「何が起き」「どのように対処し」「どのような経過をたどったか」、そして残されている課題は何かについて様々な角度から伝え、災害の風化を防ぎ、原子力災害について改めて考える場を提供することを目的として開催した。

1. モノが語る原子力災害

前半の企画展では、東京電力福島第一原発建設時から事故直後の様子、放射線の基礎知識、原子力損害賠償など、約28万点の収蔵品の中から、初公開のモノ資料を多数活用し、原子力災害を深掘りした。実物資料や写真パネル、動画など約140点を展示した。

ア 期間 令和5年7月14日（金）～11月13日（月）

イ 展示風景



東日本大震災・原子力災害伝承館 企画展

第1部 モノが語る
第2部 人が語る

原子力災害

2023年 11月23日(木祝) 2023年 7月14日(金)
2024年 3月25日(月) 2024年 11月13日(月)

会場 東日本大震災・原子力災害伝承館 企画展示室
※常設展のチケットでご覧いただけます。

開館時間 9:00～17:00(最終入場16:30) 入館料 大人:600円 小中高:300円
大人 団 体(20名以上):460円
休館日 火曜日・年末年始(12月29日～1月3日) 小中高団体(20名以上):240円

問い合わせ 東日本大震災・原子力災害伝承館 福島県 双葉郡双葉町中野字高田398
TEL:0240-23-4402

東日本大震災・原子力災害伝承館 企画展

第1部 モノが語る原子力災害

第2部 人が語る原子力災害

8/6⑨・8/19⑨・9/10⑨ 13:00-15:00 放射線がわかる!

8/20⑨ 13:00-15:00 放射線がわかる!

7/23⑨ 13:00-15:00 放射線がわかる!

参加費無料

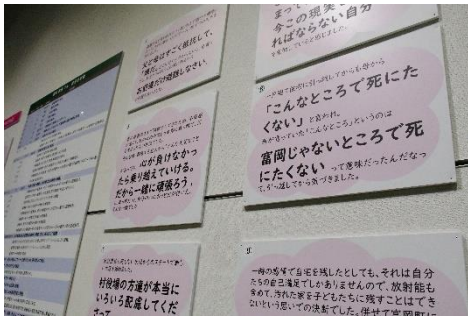
お問い合わせ 福島県 双葉郡双葉町中野字高田398
TEL:0240-23-4402 FAX:0240-23-4403
電子メール archive@fpj.or.jp HP https://www.fpj.or.jp/

2. 人が語る原子力災害

後半の企画展では、原子力災害について、避難や避難生活などを経験した11人の証言をパネルや映像など紹介する展示を行った。会期中に展示の入れ替えを行い、福島県出身の若手俳優2名に関する展示も行った。また、企画展に関連したイベントのバスツアーを実施した。

ア 期間 令和5年11月23日(木・祝)～令和6年3月25日(月)

イ 展示風景



東日本大震災・原子力災害伝承館 企画展

人が語る原子力災害

2023年11月23日(木・祝)
2024年3月25日(月)

企画展第2部

2023年11月23日(木・祝)～2024年3月25日(月)

休館日 火曜・水曜・木曜(12/29～1/3)

開館時間 9:00～17:00(最終入館16:30)
入館料 一般200円、小中学生300円

企画展中では展示入れ替えを行います。

前半 2023年11月23日～11月29日
後半 2023年11月23日～11月29日

東日本大震災・原子力災害伝承館

福島県法政大学附属図書館 4F
〒981-8502 福島市南大町1-1-1
TEL 0240-28-4409

自分が経験したことを語る「言葉」にはその人の思いが込められています。

この企画展では原子力災害について、当時を経験した11人の証言をパネルや映像などで紹介し、被災した人の視点で原子力災害を振り返り、考える場とします。

原子力災害に生かされた地域、年齢、立場などによって、人十色の経験があります。人と人とつながることでそれぞれの考えや思いなどを伝えたいです。

期間中は前半と後半で展示替えを行い、会期の後半では福島県出身の若手俳優の展示も行います。

名前	①震災時の居住地	②震災時(2011年)の年齢	③経歴内容
横田 善広さん	①浪江町	②51歳	③双葉町の学校教職員としての責務
岩本 美智子さん	①双葉町	②37歳	③特別養護老人ホームでの対応
渡辺 目子さん	①大崎町	②45歳	③役場職員としての対応と普済の決断
宗像 涼さん	①富岡町	②12歳	③避難所生活でのたくさんの出会い
唐木 幸恵さん	①富岡町	②57歳	③避難先でもらったたかさんの支え
佐々木 茂夫さん	①浪江町	②58歳	③避難先での自治会コミュニティ
今泉 春雄さん	①双葉町	②57歳	③双葉町の伝統文化を次世代に継ぐ
小泉 良空さん	①大崎町	②14歳	③中学生ながら感じた避難生活
遠藤 朝三さん	①富岡町	②55歳	③避難先で生まれたダンボールアート
横田 龍儀さん(俳優)	①川内村	②16歳	③避難先で芸術界への道が拓ける
富田 望生さん(俳優)	①いわき市	②11歳	③東京にいけない理由

イベント 被災地バスツアー

解説を聞きながら伝承館周辺を巡るバスツアー

日時 2024年3月2日(土)
13:30～15:00

募集人数 最大20人
参加費 無料

詳しくはこちらから

お問合せ先
企画展担当 福島イノベーションフォレスト情報推進機構
〒974-2402-23-4402 F0X0240-23-4403
Eメール archive@ipo.or.jp
HP https://www.ipo.or.jp/arc/

東日本大震災・原子力災害伝承館
◆(双葉町) 茨城県いわき市双葉町2-7-7 ◆(浪江町) 福島県浪江町12-9 (817.5km)

3. 関連イベント

企画展に関連したイベントを実施した。

(1) 被災地フィールドワーク

学芸員などの解説を聞きながら、伝承館周辺を巡るバスツアー。企画展の会期中に前半で3回、後半で1回開催した。前半の3日間では43名、後半には19名の方に参加いただいた。なお、後半のバスツアーは企画展の特性を活かし、個人の被災体験を盛り込みながら、大熊町内を中心に回った。

ア 日時 令和5年8月6日(日)、8月19日(土)、9月10日(日)、令和6年3月2日(土) 各日13時～15時

イ ルート 8月6日、19日、9月10日のルート

伝承館→見晴台→請戸小学校→双葉南小学校→JR双葉駅前→伝承館

3月2日のルート

伝承館→大野幼稚園跡地→大熊インキュベーションセンター→JR大野駅前→大熊中学校跡地→JR双葉駅前→伝承館

(2) 霧箱の製作実験

放射線の飛跡を見ることができる装置「霧箱」を、身近な材料で作る実験教室。中学生以上を対象として開催し、3名の方に参加いただいた。

ア 日時 令和5年9月10日(日)13時～15時

イ 場所 伝承館研修室

(3) 液状化と津波の実験観察

大きな地震が発生した際に起きる「液状化現象」「津波」の仕組みを観察する実験教室。10名の方に参加いただいた。

ア 日時 令和5年7月23日(日)13時～15時

イ 場所 伝承館研修室

3節 出張展示

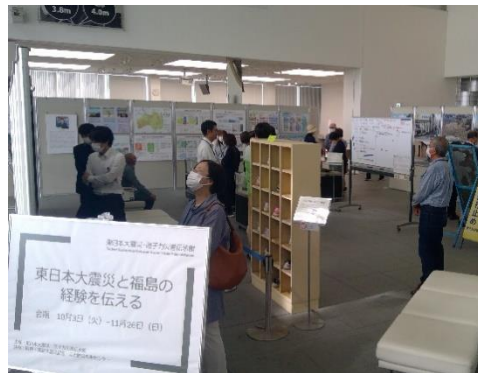
1. 人と防災未来センター出張展

関西圏では初となる出張展を兵庫県神戸市の「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」で開催した。西日本では南海トラフ巨大地震が懸念される中で、東日本大震災による地震、津波、原発事故の被害の実態と、被災地の「今」を伝え、経験と教訓を発信した。また、会期中に職員による解説会や語り部による講演会を実施した。

ア 期間 令和5年10月3日(火)～11月26日(日)

イ 会場 人と防災未来センター 1階エントランス

ウ 展示風景



エ 関連イベント

- (ア) 展示解説会 令和5年10月3日(火) 11:00~12:00

当館の学芸員が展示会場を回りながら、展示物とその背後にあるストーリーを参加者の皆さんにお伝えした。

- (イ) 伝承館学芸員による講演会「東日本大震災の経験」令和5年10月3日(火)
13:30~14:30

12年前に何が起きたのか、その後はどんな経緯をたどっているのか、「東日本大震災」について基礎的な事柄から現在の状況までについて当館の学芸員が講演を行った。

- (ウ) 出張語り部講話 令和5年11月5日(日) 13:30~15:30

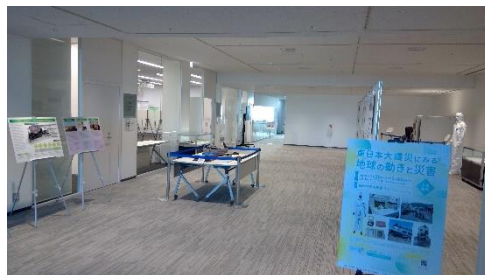
出張語り部講話は、2部構成で実施し、第1部は、NPO法人富岡町3.11を語る会の代表、当館職員による語り部講話を行った。第2部では、人と防災未来センターが定期的に行っている「災害伝承“語り継ぎ”探求サロン」として、人と防災未来センターの平林氏と語り部とのパネルディスカッションを実施した。オンラインも含め44名の方に参加いただいた。



2. 日本科学未来館出張展

福島県と連携し、日本科学未来館で震災と復興を伝える特別展を開催した。写真や実物資料に加え、福島県内の震災伝承施設を紹介するパネルを展示した。

- ア 期間 令和6年1月28日(日)～2月26日(月)
- イ 会場 日本科学未来館 7階
- ウ 展示風景



3. 消防博物館パネル展

東京の消防博物館（東京消防庁消防防災資料センター）で初の出張展示を実施した。当時の東京消防庁の対応や被災地の現状をパネルや実物資料で伝えた。

- ア 期間 令和6年2月1日(木)～3月17日(日)
- イ 会場 消防博物館 1階展示コーナー
- ウ 展示風景



4. みやぎ津波伝承館出張展

みやぎ東日本大震災津波伝承館（宮城県石巻市）にて、特別企画「東日本大震災・原子力災害伝承館パネル展」を実施した。県外の東日本大震災の伝承施設と連携した企画展を開催するのは初。

東日本大震災・原子力災害伝承館の紹介や福島県での被災状況を伝えるパネル23枚を展示し、地震や津波、東京電力福島第一原発事故に伴う原子力災害という「複合災害」の事実を伝えた。

ア 期間 令和5年11月5日（日）～11月30日（木）

イ 会場 みやぎ東日本大震災津波伝承館

ウ 展示風景



4節 エントランス展示

1. UR都市機構パネル展

独立行政法人都市再生機構が主催する「UR都市機構フォトコンテスト2022・2023」の復興部門の受賞作品などを展示した。

ア 期間 令和5年4月28日（金）～5月22日（月）

令和6年2月19日（月）～3月25日（月）

イ 展示風景



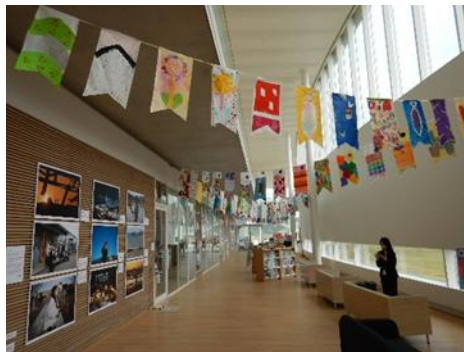
2. 鯉アートのぼり展

福島大学 美術教授 渡邊晃一先生が 2011 年から制作・収集している復興祈念の鯉アートのぼりの一部を伝承館エントランスに展示した。

また、この展示に合わせて、来館者に、思い思いの色で鯉の塗り絵をしてもらう「鯉アート」を行った。双葉郡内の川は鯉が遡上してくることで有名であることから、鯉が故郷の川に戻ってくるように、双葉郡にもたくさんの方が戻ってくるようにとの願いを込めて実施した。

ア 期間 令和5年5月4日（木・祝）～6月5日（月）

イ 展示風景



3. 浪江町パネル展

令和5年3月31日に浪江町の特定復興再生拠点区域の避難指示が解除されたことを踏まえて企画し、解除当日の様子やこれまでの復興の歩みを写真、動画を展示した。

ア 期間 令和5年5月24日（水）～9月23日（土）

イ 内容


東日本大震災・伝承館
原子力災害

浪江町パネル展

- ・2023年3月31日浪江町の特定復興再生拠点区域の避難指示解除。
- ・帰還困難区域で住民の居住が可能となったのは4例目。

今回、浪江町の面積の約3%（6.61ha）が避難指示解除されたが、また、帰還困難区域が帰還困難区域として残っている。

2023年3月31日
浪江町内特定復興再生拠点区域
の避難指示解除時の吉田町長の
コメント



高田 光 浪江町長

ようやく津島、未森、室原地区が解除となりました。しかし、この解除はゴールではありません。私はスタートだと考えています。帰還困難区域の全域解除に向け、まずは、この地域の復興を実現しなければなりません。安心、安全な生活環境のため、警察や消防と連携して駐在所や消防屯所を整備しました。また、デマンドタクシーや移動販売の提供エリアも拡大します。

津島地区は独自の文化や歴史があり、未森・大堀地区には伝統工芸品の大堀相馬焼があります。そして、室原地区は常盤自動車道のインターチェンジがあります。3地区の特徴を活かして、民間が投資しやすい環境を整えていきたいと考えています。

震災前の浪江町①

- 世帯数：7,671世帯
- 人口：21,434人
- 面積：223.14ha
- 主な特産品：大堀相馬焼、魚介類、地酒、なみえ焼そば



大堀相馬焼
なみえ焼そば
地酒

震災前の浪江町②



マリパークなみえ
2010年に開催された十日市の様子
2004年に安達祭で奉納された浪戸の田楽踊りの様子
2011年2月に開催された裸祭りの様子
2008年に開催されたサケやな場の様子
陶芸の杜おぼり

震災後の浪江町の歩み

2011年 3月11日 東北地方太平洋沖地震発生。福島第一原子力発電所について「原子力緊急事態宣言」発令。災害対策本部を津島支所へ移転完了。
 3月12日 二本松市役所東和支所に災害対策本部を設置。
 4月 4日 浪江町役場二本松事務所設置。(二本松市役所東和支所2階)
 4月 5日 岳温泉、土湯温泉、猪苗代町、北塩原村、磐梯町の約170カ所の旅館・ホテル等へ二次避難開始。
 5月 3日 浪江町地区行方不明者捜索に自衛隊投入。
 5月 9日 馬場町長「畑中八束」を示す。
 5月23日 浪江町役場二本松事務所を二本松市郭内、福島県男女共生センター内に移設。
 2012年10月 1日 浪江町役場二本松事務所移転。(平石高田工業団地内)
 2013年 2月17日 震災後初めて避難先で安寝祭。(福島市、二本松市) 第8期「イグランド」で「なみえ焼そば」を出品した「浪江焼そば王国」が「イグランド」に輝く。
 2014年 3月24日 浪江町復興まちづくり計画を策定。
 5月16日 浪江町地区で震災後初となる田植え。
 2015年11月27日 浪江産の米を震災後初めて販売。
 2016年10月27日 浪江町役場隣接地に仮設商業協同店舗施設「まち・なみ・まるしえ」オープン。
 2017年 3月27日 浪江診療所を開所。
 3月31日 避難指示解除準備区域および居住制限区域の避難指示が解除。

大震災による被害状況

2011年3月11日に起きた大震災により、浪江町では震度6強を観測した。大震災に伴う大津波により、浪江町には最大で高さ15m（5階建てビル）の津波が押し寄せ、約6kmが浸水した。

人的被害
 死者：182人
 (溺死 150人 行方不明31人 家屋倒壊による圧死1人)
 間接死：442人

建物被害
 全壊家屋：651戸
 (高災586戸 地震65戸)

浪江町津島地区
 浪江町津島地区
 浪江町津島地区

2017年 4月 1日 JR常磐線 浪江駅～小高駅間が運転再開。
 5月20日 震災後初の飲食店「食事処いふ」がオープン。
 9月20日 国道114号の特別通過交通開始。
 11月25日、26日 震災後初の町内での「十日市祭」開催。
 12月22日 国が浪江町特定復興再生拠点区域復興再生計画(津島拠点、未森拠点、堂島拠点)を認定。
 2018年 1月 2日 震災後初の浪江港での「初出立」開催。
 9月29日 ふたばワールドinなみえ。(浪江町地域スポーツセンター)
 2019年 7月14日 震災後初のスーパーマーケット「イオン浪江店」がオープン。
 2020年 3月 7日 福島大業工ネルギー研究フィールド(FNR)が開所。
 3月14日 JR常磐線 浪江駅～高岡駅間が運転再開し、JR常磐線が全線開通。
 2021年 3月20日 「道の駅なみえ」グランドオープン。
 10月24日 震災復興浪江町立浪江小学校が開校。
 11月 1日 ふたば自動車学校が再開。
 12月12日 ラッキー公園なみえまち開館。
 2022年 3月11日 追悼の場「先人の声」が浪江町地区に完成。
 5月24日 移動式水素ステーション「ナミエナジー」が完成。
 5月27日 浜通り地域デザインセンターなみえが開所。
 6月18日 ふれあいセンターなみえが開所。
 9月16日 福島県教育研究機構(FRE)を浪江町に設置することが決定。
 10月31日 コワーキングスペース「ナミエシンカ」が開所。
 12月12日 福島水素充填技術研究センターが開所。
 2023年 3月18日 津島住宅団地完成式。
 3月31日 浪江町特定復興再生拠点区域の避難指示が解除。

原発事故による長期避難の実情②

役場機能の変遷図

①福島県男女共生センター (2011.5.23~2012.10.1)
 ②二本松市役所 東和支所 (2011.3.15~2011.5.22)
 ③浪江町役場 津島支所 (2011.3.12~2011.3.15)
 ④浪江町役場 本庁舎 (2017.4.3~)
 ⑤浪江町役場 二本松事務所 仮設庁舎 (2012.10.1~2017.4.3)
 福島第一原子力発電所

原発事故による長期避難の実情①

相次ぐ役場機能の移転

①浪江町役場 津島支所 (2011.3.12~2011.3.15)
 12日13時には、災害対策本部機能を津島支所へ移転することを決定。通所であれば車で30分程度のところ、到着までに3~4時間かかる大渋滞が発生。人口1,400人ほどの津島地区は、8,000人を超える避難者であふれかえった。

②二本松市役所 東和支所 (2011.3.15~2011.5.22)
 二次避難の受け入れの整備を開始し、磐梯山周辺、岳温泉、土湯温泉などを中心に二次避難所を開所。ピーク時には212の施設に5,500人が避難。11月末には仮設仮設住宅への入居が進んだため完全閉鎖。

③福島県男女共生センターに浪江町役場二本松事務所を移転 (2011.5.23~2012.10.1)
 ④平石高田工業団地内浪江町役場二本松事務所の仮設庁舎を移転 (2012.10.1~2017.4.3)
 ⑤浪江町本庁舎に役場機能が復帰 (2017.4.3~)

大塚相馬焼の歴史

大塚相馬焼とは国の伝統的工芸品に指定された町を代表する特産品で、300年以上の歴史がある。日用品でありながら伝統、味わいのある焼き物として知られている。読み方は「おお塚りそうまやき」。

大塚相馬焼には3つの特徴がある。

- 二種類以上の釉薬の異なる釉薬をかけることによりできる「青ひび」。
- 内相と外相で2つの器を重ねる「二重焼」の構造・狩野派の筆法といわれる「走り駒」の絵。

2018年11月、震災後初めて、大塚相馬焼の一大イベント「大せとまつり」が町内の地域スポーツセンターで開催され、浪江の地で再興へ大きな一歩を踏み出した。

現在、道の駅なみえ内の地域産品販売施設「なみえの枝・なりわい館」では、県内各地で再開している組合所属窯元の作品を一室に集めて販売している。

6年ぶりのふるさと帰還

2017年3月31日に浪江町の居住制限区域及び避難指示解除準備区域が解除され6年ぶりのふるさと帰還が始まった。交流人口の拡大、町の賑わいを取り戻すために動き出した。

ゲート開放の様子

災害公営住宅
 新1棟分 22戸 2017年6月30日から入居開始
 第2棟分 63戸 2018年3月21日から入居開始
 ・浪江住宅団地 26戸 2020年10月1日から入居開始

JR常磐線
 2017年4月1日に浪江駅～小高駅間が開業
 2020年3月14日に高岡駅～浪江駅間が開業
 ▶JR常磐線 全線開通

浪江漁港
 2017年に漁船が帰港。
 2018年には海上の安全と豊漁を祈願する出立式が催された。

現在の浪江町民の避難状況

避難者数 推移

日付	浪江町避難者数 (人)
2012年11月30日時点	6,614
2016年11月30日時点	6,354
2020年11月30日時点	6,063
2023年3月31日時点	5,942

●浪江町避難者数 ●浪江町避難者数

【2012年11月30日時点】
 浪江町避難者：6,614人
 (関東4,315人、東北987人、中部928人、近畿147人ほか)
 浪江町内避難者：14,563人
 (県北7,835人、いわき2,170人、県中1,916人、相双1,493人ほか)

【2016年11月30日時点】
 浪江町避難者：6,354人
 (関東4,223人、東北1,110人、中部667人、近畿128人ほか)
 浪江町内避難者：14,477人
 (県北4,837人、いわき3,133人、相双2,353人、県中2,136人ほか)

【2020年11月30日時点】
 浪江町避難者：6,063人
 (関東4,007人、東北1,154人、中部565人、近畿134人ほか)
 浪江町内避難者：14,053人
 (県北4,456人、相双3,669人、いわき3,180人、県中2,018人ほか)

【2023年3月31日時点】
 浪江町避難者：5,942人
 (関東3,950人、東北1,130人、中部519人、近畿134人ほか)
 浪江町内避難者：13,516人
 (県北4,060人、相双3,827人、いわき3,014人、県中1,925人ほか)

特定復興再生拠点区域の避難指示解除範囲

津島地区、堂島地区、未森地区、大塚地区、浪江町全体

避難指示解除当日のパトロール出動の様子 (2023年3月31日)

パトロール出動への宣誓

避難指示解除式典にて挨拶を述べる吉田町長

2023年3月31日、幸徳地区の防災拠点において避難指示解除式典及びパトロール出動式が行われた。

パトロールに出発するパトカー等

避難指示解除後の解除区域内の様子 (2023年3月31日)

多くの桜があった大畑町集会所の様子

避難指示解除直後の幸徳地区中心地の様子

「F-REI生活性センター」現在は浪江町避難支援所としての機能を有している。

「幸徳住宅団地」2023年4月1日より入居の開始された。

浪江町の今①

○人口：15,395人
男：7,609人
女：7,786人

世帯数：6,644世帯

○常住人口：1,996人
世帯：1,226世帯

「祭り」

「道の駅なみえ」明治から続く歴史ある市で、当初は農家の人々の交流の場であったが、時代と共に芸能を披露する場となっていた。2017年には震災後初となる十日巾着りが開催され、なみえの郷土約100店が軒を連ねた。新型コロナウイルスの影響で中止となっていたが、2022年には毎年ぶりに町内で開催された。

「情報発信」

「道の駅なみえ」が2020年8月1日にオープンした。地域住民同士をつなぐ交流施設としての機能をはじめ、町民の日常生活を支える商業施設や観光客を迎え入れる玄関口として町の魅力を伝える情報発信機能をも備える大型複合施設となっている。

「伝統」

「講戸の田植」江戸時代末期から続く長谷田能で「若野神社」の「安波祭」に海上安全と豊漁・豊作を祈った奉納されてきた。2017年に町内で震災後初めて奉納された。震災前、講戸は講戸小の児童で構成されていたが、現在は年齢制限をしていない。

◎教育

浪江にしていることも浪江を懐かしく小学校就学前まで通える。教育と保育を一体的に行える認定こども園。最大で7時30分から18時まで預けられるため、共働き家庭にも安心。2021年に施設の増築・生協の増設等、高齢者の集いの場としても利用されている。子どもたちが安心して過ごすことができるよう、環境を整え、記念樹の植栽や花壇の花植えを通して自然に触れ合える学校環境を整備している。

浪江町立なみえ創成小・中学校

2018年4月に開校。校庭は人工芝を整備しており、天候の影響に左右されず、年間を通して運動ができる。学校敷地内には、クラブハウスや、遊具が設置されており、放課後の児童・生徒の憩いや、高齢者の集いの場としても利用されている。子どもたちが安心して過ごすことができるよう、環境を整え、記念樹の植栽や花壇の花植えを通して自然に触れ合える学校環境を整備している。

浪江にいろこども園

なみえ創成小学校・中学校

浪江町の今②

水素を活用した事業整備

浪江町内に水素水素ステーションを整備し、FCV普及を支援し、本業に貢献する。

燃料水素エネルギー研究フィールド (F-H 2 R) の燃料水素も活用することで、エネルギーの地産地消を目指す。

燃料水素ステーション (FCV) 燃料水素ステーション

水素を「つくる」「使う」「つなぐ」という各フェーズにおける課題の整理・解決を目指す。浪江町を水素実証フィールドとして活用していく。それらのPDCAを繰り返すことにより、水素社会実現を目指す。

浪江町産業団地

産業団地に立地した主な企業等

- 1 浪江町南産業団地
 - ・日本電気株式会社
 - ・日立製作所株式会社
 - ・日立ハイテク株式会社
 - ・日立システムズ株式会社
 - ・日立製作所株式会社
- 2 浪江町東産業団地
 - ・日立製作所株式会社
 - ・日立システムズ株式会社
 - ・日立製作所株式会社
 - ・日立システムズ株式会社
- 3 浪江町西産業団地
 - ・日立製作所株式会社
 - ・日立システムズ株式会社
 - ・日立製作所株式会社
 - ・日立システムズ株式会社
- 4 浪江町北産業団地
 - ・日立製作所株式会社
 - ・日立システムズ株式会社
 - ・日立製作所株式会社
 - ・日立システムズ株式会社

浪江町南産業団地 浪江町東産業団地 浪江町西産業団地 浪江町北産業団地

浪江町の今③

中心市街地の再生に向けて2026年度事業完了を目指します

「なみえ」が生まれ、人のつながり、木や竹や草花を育てる。浪江町を「なみえ」が生まれ、人のつながり、木や竹や草花を育てる。浪江町を「なみえ」が生まれ、人のつながり、木や竹や草花を育てる。

浪江町を「なみえ」が生まれ、人のつながり、木や竹や草花を育てる。浪江町を「なみえ」が生まれ、人のつながり、木や竹や草花を育てる。

浪江町東口

浪江町の今④

世界に冠たる「創造的復興の中核拠点」へ

福島国際研究教育機構 (連称F-REIフレイ) が立地します

50 複数の研究グループにより、多くの国内外の著名な研究者が参加する。F-REIが立地することで、研究・教育・産業の連携が促進され、地域活性化に貢献する。

4つの機能

- 研究開発
- 人材育成
- 産業化
- 国際交流

5つの研究分野

- 【ロボティクス】
- 【生命科学】
- 【材料科学】
- 【環境科学】
- 【社会科学研究】

施設整備までの概要

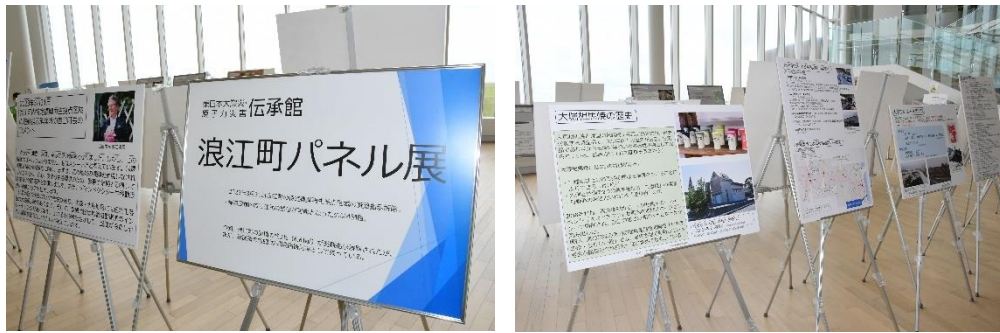
F-REI本部：ふれあいセンターなみえ内に2023年4月1日開所

F-REI本施設：浪江町川原地区に2030年度までに段階的に整備

浪江町川原地区内の施設整備計画を公表すること、さらには開所への前倒しを目指す。

- 浪江町本施設のとりまとめ、設計・計画手続
- 基本・実施設計、用地取得
- 建設工事 → 竣工後試運転開始

ウ 展示風景



4. 富岡町パネル展

令和5年1月1日に富岡町の特定復興再生拠点区域の避難指示が解除されたことを受けてパネル展を実施した。

ア 期間 令和5年5月24日(水)～9月23日(土)

イ 内容



ウ 展示風景



5. 飯館村パネル展

令和5年5月1日に飯館村の特定復興再生拠点区域の避難指示が解除されたことを受けてパネル展を実施した。

ア 期間 令和5年7月8日(土)～11月6日(月)

イ 内容

東日本大震災・ 原子力災害 伝承館

いい ちたて むら 飯舘村パネル展

- 2023年5月1日飯舘村の特定復興再生拠点区域及び区域外の一部が避難指示解除。
- 指定困難区域で住民の居住が可能となるのは6回目。
- 指定困難区域の特定復興再生拠点区域外で避難指示が解除されたのは初めて。

2023年5月1日 飯舘村の特定復興再生拠点区域の 避難指示解除時の杉岡村長コメント



令和5年4月15日、関、福島県及び村は、本村の特定復興再生拠点区域及び拠点区域外の長定曲田公園の避難指示解除について協議を行いました。協議において村は、避難指示解除日時を「令和5年5月1日午前10時」と提案し、国及び県より同意を得ました。

避難指示解除に当たっては、一昨年からの住民や団体の皆様にご理解・ご協力をいただき、ご支援、ご声援をいただきました。長定曲田では、避難指示解除に向けた生活環境の整備が進むとともに、住民の皆様・再生に対する意欲が高まっていくのを感じております。

この住民の思いを大切に未来につなげていくため、村としては「夢のあるさと希望」を目指して様々な施策を検討しています。それらの施策を進めるためにも、まずは着実な避難指示解除が必要不可欠であると考えております。

また、福島県震災復興事業等の効果確認、長定地区の復興・再生に向けた取組の情報発信等を目的として、拠点区域外の長定曲田公園を開放し、拠点区域外の土地活用に向けた避難指示解除に関する仕組みである「土地活用ホーム」を利用した取組を行います。

村としては、引き続き、指定困難区域の全廃解除を目指した取組を進めます。

そして、今後も農業の復興、路上車の誘致、道路整備等に対する解除後の継続的な支援、拠点区域外の全廃解除に向けた取組に対する支援について、国及び福島県に強く要望してまいります。

震災前の飯舘村①

- 世帯数：1,958世帯
- 人口：6,509人
男：3,281人
女：3,228人
(2011年3月1日現在)
- 面積：230.13km²
- 主な特産品：飯舘牛
トルコギキョフ
漬み大根
とぶろく





震災前の飯舘村②






震災後の飯舘村の歩み

2011年 3月11日 東北地方太平洋沖地震発生。村災害対策本部設置。
3月12日 避難所を開設し、受入開始。
(浜通りの津波被災者や原発近辺市町村からの避難者を受入れ)

3月15日 村内の空間線量率の数値が急上昇。
3月19日 栃木県鹿沼市避難所への集団避難を行う。村民511人が避難。
(希望者による緊急避難で、避難者は4月30日に帰郷)

4月11日 国が計画的避難区域の設定について公表。
4月13日 乳幼児・妊産婦及び村南部の高線量地区の希望者が避難。
4月21日 川俣町内の幼稚園、中学校、高校の校舎を借り、授業再開。
4月22日 国が村全域を計画的避難区域に指定。
5月15日 計画的避難による第一陣が避難開始。
5月17日 国が特別養護老人ホーム「いいちてホーム」を含む村内9事業所の事業継続を承認。
6月22日 村役場機能を飯舘出張所（福島市内）に移転、開所式を行う。

2012年 2月11日 第1回「いいちて村民ふれあい集会」を開催。
村民およそ1,100人が参加（福島市内/ルゼいざか）
7月17日 空間線量率に応じて避難区域を指定困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域の3区域に再編。

2013年 10月7、8日 いいちて村文化祭を開催（福島市内 福島県文化センター）
2013年 6月10日 農水省の実証事業による試験栽培の田植え（長泥行政区）。

2014年 4月1日 飯舘村役場本庁舎開所式（村役場本庁）。
7月31日 「いいちていちごランド」で村内産いちごを初出荷。
9月1日 復興公営住宅「飯舘町団地」入居開始（福島市内 飯舘町団地）。

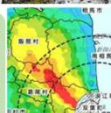
2015年 7月31日 震災後、村内初の小売店となるコンビニエンスストアが開店。
2016年 3月24日 宿泊体験館「きこり」一部再開。
7月1日 飯舘村役場庁舎移転式。
9月25日 村制60周年記念事業「いいちて60祭」。
2017年 3月31日 避難指示解除（長定地区を除く村内）
8月12日 いいちて村の道の駅まで道の駅がグランドオープン。
2018年 4月9日 「まていの里ごも園」が開園。
2019年10月17日 地元産の和牛「飯舘牛」が震災後初出荷。
2020年 3月29日 草野・飯舘・白石小学校、飯舘中学校で閉校式。
4月5日 草野・飯舘・白石小学校、飯舘中学校を統合した義務教育学校「いいちて希望の里学舎」が開校。
8月9日 「ふかや風の子広場」がオープン。
2021年 4月26日 「いいちてパークゴルフ場」がグランドオープン。
2022年 3月14日 「ゼロカーボンチャレンジいいちて」を宣言。
9月12日 株式会社いちいちと「地域見守りの取組みに関する協定」を締結。
7月22日 「飯舘村移住サポートセンター」が開所。
2023年 2月19日 いいちて村芸術祭発表会を開催。
5月1日 特定復興再生拠点区域等の避難指示解除。

地震による被害状況と放射線の影響

2011年3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震より、飯舘村では震度6弱を観測した。

人的被害
死者：1人（相馬市で津波被災）
間接死：42人

物的被害
道路陥没・土砂崩れなど約70カ所
家屋は屋根損傷など、軽微な被害多数
水道管破裂、全村断水
全村停電、電話不通



放射線物質は北西に飛散し、浪江町津島や飯舘村長泥では線量が高い状況であった。村の水道水などからは高濃度の放射線物質が検出され、目に見えない放射線への恐怖など多数の高齢者があった。

原発事故による避難状況①

全村避難の決断と避難

3月19日、希望者の第一陣が栃木県鹿沼市の避難所「フォレストアリーナ（鹿沼総合体育館）」に緊急避難。
4月11日、国は飯舘村を計画的避難区域に指定することを公表。
4月22日、村は指定を受けて全戸避難することを決断。
5月15日、計画的避難区域の指定に伴う一時避難の第一陣として10世帯が避難を開始。
6月22日、役場機能を福島市飯舘町に移転。

全戸避難を決定した中で、村内にある「特別養護老人ホーム「いいちてホーム」や「菊池製作所」など屋内作業の継続を希望した9つの事業所が、特別として作業できるような国に認められ、約550人の雇用が守られた。

村は計画的避難区域指定後から避難先の確保に手を尽くした。旅館や公的施設などの一時避難先から借り上げ住宅、応急仮設住宅への入居（二次避難）を進めた。生活環境の変化に伴うリスクを軽減するため、村から約1時間圏内への避難を進めた。

2012年7月17日には避難指示区域の見直しも実施され、指定困難区域となった長泥地区に向かう道路にはバリエードが設置された。
2017年3月31日、長泥地区を除く避難指示区域の避難指示が解除された。

原発事故による避難状況②

避難先での活動

避難生活がどれだけ続くのか見通しなかった中、村は2011年12月に「いいちてまていの里復興計画（第1版）」を策定したが、村民はやむを得ず、避難先で活動を始めたり、避難先の活動を継続したりするなど地道な前進を始めた。

人々をつなぐ芸術活動
さまざまな地区の芸術団体の活動は避難先での心の拠り所となっていた。練習を継続する団体に促し、新たに継承活動を始めた。中断していた芸術活動を復活させたりする団体の動きも見られた。

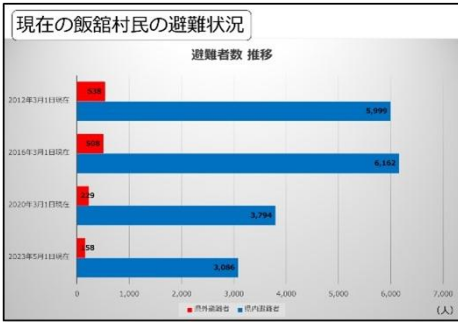
加工食品の製造販売
農地や加工場を失った女性業者たちが加工食品の製造販売やイベントの開催を避難先での健闘と協力して行い、2015年9月には復興事業を再開した。

恒例イベントの村外開催
2011年には、村民有志と支援者による「負けどろどろ！村民のつどい」や「餅つなぎの「まていの一日」」などが開催され、多くの村民が参加した。また、翌年には福島市内で「いいちて村民ふれあい集会」や文化活動の発表の場「いいちて村文化祭」を開催し、多くの村民が参加を喜び、村民同士のつながりを大いにした。これらのイベントは、現在は村内で毎年継続して開催されている。

原発事故による避難状況③

村外での営業再開
飯舘市外での避難先で営業再開する人も多数見られ、農業関連では稲作、花弁栽培、畜産などが再開された。たくさんいる村民の協力のもと実現された東産事業、安全確認を経て、「なむいぬい」(生かすいぬい)に、約370枚が取り扱われている。村民は販売目的とした「なむいぬい」販売を目的とした「なむいぬい」販売と名付け、支援を行っている。

避難先自治会の設立・運営
応急仮設住宅や公営の借家で、入居後もまち自治会が設立され、役員も積極的な活動と住民相互の協力によって、不自由な生活に何とか力を発揮しようとする取組が行われた。活動内容は、定期的に開催される村外サロンや季節の行事、移動旅行なども含まれ、入居者の人数や年齢層を考慮し実施された。



飯館村は避難後の生活や地域コミュニティ維持などのため、村から車で1時間圏内で探すよう当時の首長から指示があり、福島市や伊達市などの避難先を探すことになった。

【2012年3月1日現在】
 県外避難者：538人（埼玉県79人、神奈川県68人、栃木県51人、宮城県47人、他）
 県内避難者：5,999人（福島市3,798人、伊達市598人、川俣町512人、相馬市424人、他）

【2016年3月1日現在】
 県外避難者：508人（埼玉県76人、東京都60人、神奈川県60人、宮城県57人、他）
 県内避難者：6,162人（福島市3,873人、伊達市584人、川俣町502人、相馬市424人、他）

【2020年3月1日現在】
 県外避難者：229人（宮城県36人、埼玉県32人、栃木県26人、北海道25人、東京都25人、他）
 県内避難者：3,794人（福島市2,515人、南相馬市340人、川俣町300人、伊達市294人、他）

【2023年5月1日現在】
 県外避難者：158人（宮城県28人、埼玉県24人、北海道22人、栃木県17人、他）
 県内避難者：3,086人（福島市2,035人、南相馬市286人、伊達市252人、川俣町237人、他）

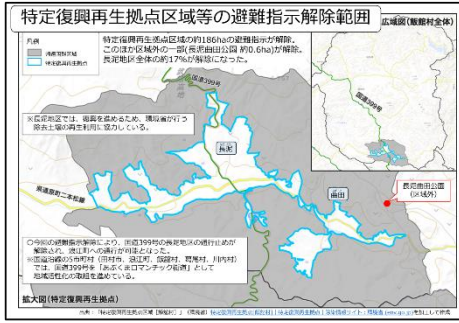
復興に向けた動き

いいいて村の道の駅まで

2017年8月12日にグランドオープンした。花をシンボルにした復興拠点として建てられた。

2020年にはまだ、越の近くに「ふかや風のちひるば」がオープンし、村の賑わいに貢献している。

「までい」とは？
 飯館流のストーリーを「までいライフ」と呼び、村づくりの基本理念としてきた。「までい」とは「両手」「左右開いた手」という意味の「両手（まで）」が語源。「大切に」「丁寧に」「じっくりと」「心をこめて」「手間暇を惜しまず」という意味で使われてきた方言である。



除去土壌の再生利用に向けた取り組み

国の課題

- 中間貯蔵施設に保管される大量の除去土壌をいかに効率的に減容処理するか。
- 本来貴重な資源である放射能濃度の低い土壌を再生資材として利用可能とする技術的・制度的・社会的条件をいかに整えるか。

再生利用の流れ

除去土壌を再生利用する際は、異物を取り除く、水分量やpHを調整する等、除去土壌を再生資材化する作業を実施する。その後、再生資材をさらに高めいまで使うことで、追加削減・録量の要なくなる低減を図っている。

選別 → 分別 → 品質調整 → 品質検査 → 再生利用

選別：除去土壌の異物を取り除く。放射能濃度の低い土壌を再生資材として利用可能とする。

分別：除去土壌を放射能濃度の低い土壌と放射能濃度の高い土壌とに分ける。放射能濃度の低い土壌は再生資材として利用可能とする。

品質調整：除去土壌の水分量やpHを調整する。再生資材としての品質を高める。

品質検査：除去土壌の放射能濃度を検査する。再生資材としての品質を確認する。

再生利用：除去土壌を再生資材として利用する。再生資材を再生資材として利用する。

長泥地区における再生利用実証事業の動き

2018年4月に認定された「飯館村特定復興再生拠点区域減容再仕計画」において、国が進める実証事業により安全性を確認し、再生資材で盛土した上で盛土することで、農用地等の造成を行い、農用地等の利用促進を図っている。

飯館村内の復旧現場から運搬した除去土壌を再生資材とし、再生資材を用いて造成した盛土実証フィールドにおいて、農産物等の栽培実証等の実証事業を実施している。

事業概要

除去土壌を資源しやすい農地の盛土として造成する事業で、飯館村内で生じた除去土壌を使用することで中間貯蔵施設への搬入を減らす役割を持つ。

長泥地区では農地造成の地盤に、安全性や生育性を高めるための減容用の盛土を造成し、花や野菜・農産物の栽培を積極的に進めている。

農地造成の様子

農産物造成の様子

避難指示解除当日の様子（2023年5月1日）

ゲート開放

村岡村長による挨拶

2023年5月1日、長泥地区に隣接する国道399号のゲート前において避難指示解除式典が行われた。この解除により、渡江町津島地区まで通行可能になった。

長泥コミュニティセンターの竣工式と長泥曲田公園の供用開始

住民の交際の拠点として整備された「長泥コミュニティセンター」

特定復興再生拠点区域外の曲田地区に整備された「長泥曲田公園」

国が実施した減容低減実証事業等の効果を経験的に確認し、曲田地区の復興・再生に向けた取り組みの情報発信等を行う拠点として整備された。

ゲート開放後、長泥コミュニティセンター敷地内において竣工式が行われた。

飯館村の今①

○人口：4,758人
 男：2,391人
 女：2,367人

○世帯数：1,808世帯
 (2023年5月1日現在)

○居住人口：1,518人

○世帯数：802世帯
 (2023年5月1日現在)

○教育
 「飯館村立いいいて希望の里学園」
 2020年4月5日に小中9年間を一貫教育する義務教育学校「いいいて希望の里学園」が飯館村で開校した。早野・飯館・白石の3小学校と飯館中学校が統合して開校した。

2023年度 全校生徒82名
 (前期課程(小学校)57名、後期課程(中学校)25名)
 「しみじみマスタープロジェクト」
 いいいて希望の里学園の子どもたちが飯館村の郷土料理や食文化について、食材の栽培から調理までの過程を体験することを目標としている。

○子育て支援
 2023年4月1日から村の子どもたちを対象に、さまざまな子ども子育て支援事業がスタートした。子どもを思い、子育てする親を思い、進化する子育て支援の推進する『あぶくま町子育て支援』「出産・子育て支援事業」「子育て応援支援金」などを創設。これらを活用し、子育てする場所の創出だけでなく、子ども達との教育を強力に支援している。

また、「奨学金返還支援事業補助金」を新設し、村の奨学金制度を改正。奨学金の返還免除の対象に、「村内で就業・起業する方」を加えた。次世代の教育を支援しながら、ふるさとを担う人材の育成にも力を入れている。

飯館村の今②

○飯館産黒毛和牛
 30~40代の若手畜産農家を中心となって、「飯館牛」の再生・新進に向けた良質な黒毛和牛の産殖・肥育に励んでいる。

飯館産黒毛和牛

○花卉栽培
 他地域からの移住者で高収入・若者新移民農業者などによるアルストロメリアやトルコギキョウなどの栽培が盛んに行われている。

花卉栽培の様子

○もち米「あぶくまもち」
 飯館町が高冷地向けに開墾し、飯館村も品種の開発段階から種子を提供するなど協力し、その後も栽培拡大に取組んでいた品種。2021年に栽培実証を行い、その効果を確認を始めた。2022年12月には新米のあぶくまもちを活用したおこわなどをまいて飯館町内などで販売し、大変好評であった。

道の駅「までい飯」での和牛販売の様子

飯舘村の今③

○伝統
「八木沢の田植踊り」
2023年2月に「いい田村芸楽発表会」が広域復興で、飯舘村内で開催された。その中で「八木沢の田植踊り」は12年ぶりの復活を遂げた。

「小宮の田植え踊り」
2019年3月31日、稲崎神社（小宮地区）で、41年ぶりの復活祭が行われ、田植え踊りが奉納された。小宮の田植え踊り、全村避難中の2014年に保存会が復活させ、子ども達への継承も続けている。

「比叡の三匹獅子舞」
現在も飯舘村内では実施できず、復活はなされていない。伝統の存続に向けて関係者が取り組んでいる。

「八木の神楽」
飯舘で継承されてきた獅子神楽で、珍しい「太刀のみ」といふ項目がある。

飯舘村の今④

○林業販売
2022年9月12日、スーパーマーケット「いちい」の移動スーパー「とくし丸」が、村内での林産販売をスタートした。
飯舘村は、株式会社いちいと「地域守りの取組みに関する協定」を締結した。「とくし丸」の訪問販売を通じて地域の活性化に協力し、コミュニティの発展を行政サービスに生かしている。

○木質バイオマス「飯舘バイオパートナーズ」
林業再生・森林再生を回り、パーク（樹皮）や薪炭材などの副産物が豊富とされる木質バイオマスを、木質バイオマス発電燃料として、安全かつ有効に活用していく。バイオマス発電施設の建設を中核に、余熱を農業に活用するなど地域振興に貢献するものである。「飯舘みらい発電所」が現在建設中であり、2024年春頃の営業運転開始を目標としている。
また、イイタテバイオテック株式会社が新たに設立され、集約型林業事業を担うなど地域の活性化に貢献している。

○ゼロカーボンビレッジいいたて
飯舘村は2050年の温室効果ガス排出削減目標ゼロを目指し、「ゼロカーボンビレッジいいたて」を宣言した。再生可能エネルギーの活用や、森林再生の取り組みなどを通して、温室効果ガスの排出削減を推進している。
村民一人ひとりが将来に対する責任を自覚し、飯舘村の中山間地域特有の自然条件、立地条件を活かした持続可能な未来を創出していく。

○なりの支援
企業誘致、起業支援を含む産業創出を進めている。
次世代を担う飯舘村長の育成・確保を促進し、村内の産業の振興を図るため、村民が行う取組に対して支援を行っている。
そのために補助金などの交付をしている。

ウ 展示風景



6. トルコ・シリア地震報道写真展

令和5年2月6日に発生し、5万人以上が犠牲となった、トルコ・シリア地震の報道写真パネル展を開催。

読売新聞社のカメラマンが現地で撮影した写真を展示した。

ア 期間 令和5年7月8日（土）～8月7日（月）

イ 主体 読売新聞社、伝承館

ウ 展示風景



7. 写真と俳句展

東日本大震災・原子力災害後の浜通り地区を何度か訪れ、見聞きしたことを写真と俳句の形にまとめた作品を展示した。

ア 期間 令和5年9月21日（木）～10月13日（金）

イ 主体 ニューホライズンコレクティブ合同会社

ウ 展示風景



8. 3.11 伝承ロードパネル展

震災の記憶や経験を忘れずに後世に伝承するため、東日本大震災の実情と教訓等を映像やパネルにより紹介し、被災地の被災前、被災直後、復興10年の状況について写真パネルにより展示した。

ア 期間 令和5年10月20日（金）～10月30日（月）

イ 主体 3.11 伝承ロード推進機構

ウ 展示風景



9. 万博・復興企画パネル展

2025年の万博に向けて一連の活動を通じた、関西や海外を中心とした企業の浜通り地域への誘致を目的とした展示を行った。

ア 期間 令和5年10月30日（月）～11月26日（日）

イ 主体 経済産業省

ウ 展示風景



10. 阪神・淡路大震災パネル展

神戸市にある「人と防災未来センター」による巡回展。阪神・淡路大震災の被害や復旧・復興の状況を写真やデータなどをグラフィックパネルで展示した。

ア 期間 令和6年1月5日（金）～2月24日（土）

イ 主体 人と防災未来センター

ウ 展示風景



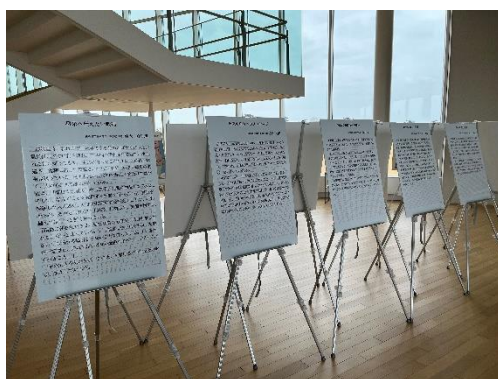
11. 未来への手紙パネル展

東日本大震災・原発事故を知らない世代へ記憶や教訓をつないでいくことを目的とし、県内の中学生に震災学習で学んだことや素直な思いを手紙として募集し、選定会で選ばれた15作品を展示した。

ア 期間 令和6年3月11日（月）～4月15日（月）

イ 主体 福島県

ウ 展示風景



12. 盆踊りの継承パネル展

当館の常任研究員による祭祀と復興についての研究成果を令和6年度に企画展示にて展示する予定であり、その前段としてエントランスで双葉8町村及び飯館村の盆踊りに関する展示を行った。この展示では、震災復興への祭祀の

2章 展示

関わりと震災を乗り越えながらの伝統文化の継承（祭祀）について、来場者に伝えることを目的とした。

ア 期間 令和6年3月16日（土）～令和6年4月15日（月）

イ 展示風景



3 章 資料収集・保存

1 節 資料収集・保存・収蔵

「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設」に関する資料収集ガイドライン」に基づき、資料の収集・保存を実施した。

1. 資料収集

(1) 収集点数 (令和6年3月31日現在)

	資料形態	令和4年度まで	令和5年度	計
一次資料	モノ	9,543	104	9,647
	紙	80,561	156	80,717
	写真	110,130	5,217	115,347
	映像・音声	5,013	100	5,113
二次資料	図書・雑誌	3,116	203	3,319
	冊子・会報	22,980	191	23,171
	新聞	51,358	1,388	52,746
	視聴覚資料	530	8	538
合計		283,406	7,367	290,773
備考		(その他 175 点含む)		(その他 175 点含む)



※ 「その他」は、デジタルデータであるものの、拡張子が特殊といった理由で、PC上で中身を確認できなかったもの。

(2) 主な収集物 (令和5年度)

ア 一次資料

(ア) モノ

- ・ 特別養護老人ホームで震災時に使用されていた車いすやストレッチャー
- ・ 国内外から支援のあった個人線量計
- ・ 県立大野病院で避難者が食べていた食料の残骸
- ・ 浪江町立津島小・中学校に残されていた伝言板や支援のために贈られてきたランドセル

<p>長期間放置され、ネズミにかじられた米袋 (双葉町)</p>	<p>浪江町立津島中学校の校舎平面図 (浪江町)</p>
	

(イ) 紙

- ・震災前の地域の生活が分かるチラシ
- ・津島中学校の校歌が書かれた紙
- ・避難所となった津島小学校の体育館に残されていたメモ書き

(ウ) 写真

- ・避難指示解除（浪江町・富岡町・飯館村）時の写真
- ・震災後の請戸小学校内部や南相馬市小高区周辺の写真
- ・双葉町中野八幡神社で神輿による催しが行われた時の写真

双葉町の八幡神社で行われた神輿による催しが行われた時の写真（双葉町）	飯館村長泥地区の避難指示解除された時の写真（飯館村）
	
一時避難者のいた跡が生々しく残る県立大野病院内の写真（大熊町）	被災地への石油輸送を行う貨物列車（猪苗代町）
	

(エ) 映像・音声

- ・企画展「人が語る原子力災害」にて収集した証言映像
- ・消防士や震災当時高校生だった人の証言
- ・帰還困難区域にて霧箱による放射線飛散の様子を撮影した動画

イ 二次資料

(ア) 図書・雑誌

- ・東日本大震災と箱庭療法 ～こころの糸をつむぐ～
- ・みんなで考えるトリチウム水問題
- ・ふくしま原発作業員日誌

(イ) 冊子・会報

- ・津島中学校卒業文集
- ・福島県「県民健康調査」報告
- ・浪江のこころ通信-避難指示一部解除から5年間の記録-

- (ウ) 新聞
 - ・2011年3月から7月までの全国主要5紙（朝日新聞・産経新聞・日本経済新聞・毎日新聞・読売新聞）
- (エ) 視聴覚資料
 - ・指揮官たちの決断 東日本大震災と自衛隊

2. 証言収集

東日本大震災と原子力災害に関する様々な体験や想いを後世に残すことを目的に、令和5年3月11日（土）から、被災体験を綴った手記や日記などを広く募集する取組みを開始した。なお、被災体験が書かれた書籍、音声・映像記録も対象としている。募集期限は設けず、長期的に収集していく予定である。令和5年度は15件、計17人の方の証言収集を行った。

資料収集チラシ

東日本大震災・原子力災害 伝承館

3.11震災関連資料の提供にご協力ください。

東日本大震災から10年以上の歳月が経過しました。当館では、震災の記録と教訓を後世に残し、継承していくため、震災関連資料の収集・保存を行っております。震災関連の写真や映像、音声などの資料・情報をご提供いただける方は、お電話、または下記の専用メールアドレスにてご連絡をお願いいたします。

収集資料(一例)

- 震災前の地域生活の様子が分かる資料
- 震災関連の写真や映像、音声などの資料・情報をご提供いただける方は、お電話、または下記の専用メールアドレスにてご連絡をお願いいたします。
- 復旧・復興の過程が分かる資料
- 地震や津波、原子力災害の影響を伝える資料
- 手記や日記など被災体験記
- 震災時の記録映像や証言映像、音声
- 避難生活に関する資料
- 避難地域内の実物資料

資料の取扱いについて
 ・提供いただいた資料は当館で保存・公開することを基本とします。
 ・個人情報の取扱い、ご留意ください。

東日本大震災・原子力災害 伝承館
 TEL0240-23-4402 (事業課)
 shiryu@fipo.or.jp

証言収集チラシ

東日本大震災・原子力災害 伝承館

あの日の記憶

残しておきたい

東日本大震災・原子力災害から10年以上が経ちました。あのとき話せなかった思い、胸にしまい込んだ悲しみ、怒り、ずっと気がかりだったこと…など、あなたの被災体験や身近な方の手記などをお寄せください。当館では、皆さまの声を収集・保存し、後世に伝えていきます。

たとえば、次のようなものを受け付けています。

- 東日本大震災および原子力災害で被災された方が書かれた、被災体験に関する手記、日記など。
- 被災体験が掲載・記録されている書籍、音声・映像記録など。

詳しくは裏面をご覧ください

3. 資料活用

震災と原子力災害の記録と経験を伝えるため、伝承館が所蔵する資料や震災関連パネルの貸し出しを行った。

ア 新聞博物館

- (ア) 期間 令和5年8月1日（火）～10月31日（火）
- (イ) 貸出資料 写真展示パネル

イ 読売新聞東京本社

- (ア) 期間 令和5年8月24日（木）～10月6日（金）

- (イ) 貸出資料 トルコ・シリア地震報道写真展パネル
- ウ 浪江町役場
 - (ア) 期間 令和5年9月27日(水)～10月13日(金)
 - (イ) 貸出資料 浪江町パネル
- エ みやぎ東日本大震災津波伝承館
 - (ア) 期間 令和5年10月29日(日)～12月4日(月)
 - (イ) 貸出資料 写真展示パネル
- オ 福島中央テレビ
 - (ア) 期間 令和5年11月10日(金)
 - (イ) 貸出資料 電子データ
- カ 環境省特定廃棄物埋立情報館 リプルンふくしま
 - (ア) 期間 令和5年12月3日(日)～令和6年3月31日(日)
 - (イ) 貸出資料 電子データ
- キ 京都大学経済研究所先端政策分析研究センター
 - (ア) 期間 令和6年2月14日(水)～2月20日(火)
 - (イ) 貸出資料 企画展制作パネル・写真展示パネル
- ク 国見町立県北中学校
 - (ア) 期間 令和6年3月8日(金)～3月31日(日)
 - (イ) 貸出資料 電子データ

2 節 資料閲覧室

1. 図書資料閲覧サービス

資料閲覧室には図書類を約2,200冊配架している。このうち、重複を除いた図書の総数(版違いを含む)は1,984冊である。これらの図書は開架棚に配架され、利用者が自由に閲覧できる。

現在のところ、資料閲覧室では貸し出しサービス、複写サービスおよびレファレンスサービスは提供していない。一方でWeb-OPAC(オンライン蔵書目録)を整備し、インターネット上から蔵書検索ができる。

2. 収蔵図書の内容

資料収集の当初から震災記録誌、字誌、地域史、学術調査報告など流通量が少ないローカルな図書(例えば関係者にのみ配布された図書など)の収集に力を入れてきた。また、令和3年度に企画展「絵本で見る東日本大震災」を開催する際に集めた絵本なども配架している。

3. 国立国会図書館データベース「ひなぎく」との連携

令和6年1月12日(金)から国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」と連携を開始し、当館が所蔵する震災や原子力災害に関する図書、自治体の記録誌等約1,900タイトルが検索できるようになった。

連携により、当館が所蔵する図書が、これまで以上に多くの利用者の目に触れ、防災・減災対策や防災教育などに活用されることが期待される。



4章 語り部

1節 館内語り部講話

1. 館内語り部講話

東日本大震災及び原子力災害を経験した地域住民の方の生の声を聴くことができる「語り部講話」を館内で開催している。伝承館に登録している語り部が日替わりで担当しており、入館券をお持ちの方であればどなたでも聞くことができる（各回先着 18 席（※令和 6 年 2 月 27 日から 27 席に増席））。

展示エリア内のワークショップスペースにて、休館日を除く毎日、1 日 4 回（各回 40 分間）開催している。

館内語り部講話時間

第 1 回	10 : 00～10 : 40
第 2 回	11 : 30～12 : 10
第 3 回	13 : 30～14 : 10
第 4 回	15 : 00～15 : 40

2. 館内語り部登録人数及び実績

館内語り部には、31 名が登録している（令和 6 年 3 月末現在）。

令和 5 年度は、1,220 回開催し、約 11,246 人が聴講した。

（各語り部のテーマ一覧）

紙芝居「菜の花物語」
あの日から 12 年間の久之浜町 そしてこれからは…
震災経験とその後の活動
東京における 3.11 東日本大震災と福島第一原発事故
震災当日の行動と教訓及び復興事業について
「当たり前」はない
自分の命を守る
震災紙芝居
長い避難生活を支えた励ましの数々
震災・原発事故を語る
東日本大震災と避難生活の実態
震災と私 ～その時、私の周りで起きたこと～
変わりゆくふるさと それでも前を向いて
東日本大震災—あの日から 12 年が過ぎて
行動・思い・学んだこと
東日本大震災あの日、あの時
東日本大震災原発事故により避難した体験をダンボールアートを通して語り伝える
防災意識を高めよう。みんなと、自分を！
原発から 25 キロに住む 1 人として

震災・原発事故から復興へ
震災後の2日間とその後
震災発生から全町避難を振り返って
『残照』～震災の記憶～
置き去りにされた動物
私の東日本大震災、経験を教訓に
伝統文化存続の危機と伝承
10年かけて踏み出した一歩～大好きな地元との向き合い方～
復興を支える 人との繋がり
震災・避難経験を振り返って
生きのびるために
震災・避難・現在の歩み
震災時の体験と伝えたいこと
双葉の子どもたち
私の12年
請戸でおきたこと
21歳の私が伝えたいこと
東京における3.11東日本大震災と福島第一原発事故
役場職員、震災直後の5日間

3. 館内語り部を対象とした研修

館内語り部の技術向上と交流を目的として語り部研修を2回実施した。

○第1回 令和5年8月18日（金）、19日（土）

参加者：22名

場 所：伝承館研修室

講 師

18日：福島大学環境放射能研究所 高田 兵衛 准教授

「福島沿岸を中心に日本全国の事故前から事故後の放射性セシウムの濃度変遷／海洋でのセシウムとトリチウムの動きの違いや福島沿岸のトリチウム濃度について」

19日：『食と放射能に関する説明会』福島大学環境放射能研究所

和田 敏裕 准教授

「福島県の水産物の放射能汚染の推移と漁業復興の現状と課題」

○第2回 令和6年2月22日（木）

参加者：18名

場 所：福島第一原子力発電所 視察

2節 館外での語り部講話、交流

1. 神戸出張展関連イベントでの出張語り部講話（再掲）

日時：令和5年11月5日（日）

場所：兵庫県神戸市 人と防災未来センター

「人と防災未来センター」で開催した出張展に合わせ、語り部講話を実施した。当日11月5日は「津波防災の日」であり、甚大な津波被害を受けた浪江町の請戸小学校出身の当館若手職員と、NPO「富岡町3.11を語る会」の代表が、震災の教訓や原発事故による避難、被災当時の思い、伝え続けることの重要性を伝えた。



2. パネル展関連イベント「福島で語る、阪神・淡路大震災」

日時：令和6年1月14日（日）

場所：伝承館

阪神・淡路大震災のパネル展に合わせ、語り部イベントを開催した。1部は兵庫県淡路市（旧北淡町）生まれで発災当時、生後2か月だった米山未来さんが語り部講話を実施。2部で当館職員の語り部2名と交流トークを行った。震災を伝えることの意義や、能登半島地震で感じたことなどを語り合った。

3. 長崎青少年ピースボランティアとの交流

日時：令和6年2月11日（日）

場所：伝承館

長崎青少年ピースボランティアの高校生、大学生、大学院生が来館。当館職員の語り部らと防災の教訓、語り部として伝えたい点などについて意見交換を行った。

パネル展関連イベント「福島で語る、阪神・淡路大震災」(伝承館)



長崎青少年ピースボランティアとの交流(伝承館)



5章 研修

1節 一般研修

伝承館では、展示見学に加え、研修プログラムを提供しており、福島県で起きた未曾有の複合災害の事実や復興の現状・課題を体感することができる。

1. 研修語り部講話

震災を経験した語り部から、当時の不安や悲しみ、災害への備え、未来に向けての想いなどを聞く。

2. フィールドワーク

双葉町と浪江町をバスで巡り、同乗するフィールドパートナー（ガイド）の説明を聞きながら被災地の現状を見学する。

3. ワークショップ

研修を通して知ったこと、感じたことを振り返り、参加者の間で共有する。

※ ワークショップは、フィールドワークや研修語り部講話と併せて申込み「フルパッケージ」の場合に限り受講できるプログラム。

語り部講話



フィールドワーク



ワークショップ



4. 研修料金

		一般	小中高生	
入館料 ※減免制度あり	個人（1人あたり）	600円	300円	
	団体入館料（1人あたり）	480円	240円	
研修受講料 （1人あたり）	フルパッケージ （4時間～）	ガイダンス （15分）	3,000円	1,500円
		展示見学 （60分）		
		フィールドワーク （60分）		
	選択受講 ※複数選択可	展示見学 （60分）	1,000円	500円
研修語り部講話 （40分）		1,000円	500円	

※ その他、研修料金等の詳細な料金体系については、東日本大震災・原子力災害伝承館HP（<https://www.fipo.or.jp/lore/>）を参照。

5. 一般研修参加者数

	令和5年度合計		開館以降累計	
	団体数	人数	団体数	人数
全体	351	13,955	867	38,292
学校団体	108	7,863	359	25,869
一般団体	243	6,092	508	12,423

2節 専門研修

伝承館では、東日本大震災と原子力災害について、より詳しく学ぶことができる専門研修を実施している。

1. 専門講座

館長及び上級研究員による各専門分野に関する専門講座を実施した。

(1) 講師と専門分野

講師	分野
館長 高村昇	放射線被ばくと健康被害、リスクコミュニケーション
上級研究員 安田仲宏	原子力防災と放射線
上級研究員 関谷直也	風評被害、災害流言、災害情報、日本の防災対策、自然災害の避難、原子力災害の避難
上級研究員 開沼博	福島復興・廃炉の社会科学、ボードゲーム型復興・廃炉体験で学ぶ福島学

(2) 実績

受講者数 184名（9団体）

（内訳）

学校関係 150名（6団体）、その他（研究機関、企業等）34名（3団体）

2. 上級・常任研究員の企画による研修プログラム

(1) 福島学カレッジ（令和5年12月～令和6年1月 全4回）

開沼上級研究員等が講師となり、中高生を対象に、「福島の研究」を実践する機会を提供した。県内外から中高生13名が参加した。

東日本大震災・原子力災害伝承館の展示見学や講義、フィールドワークを通じて震災・原子力災害への学びを深め、大学教授や伝承館の研究員の支援を受けて、研究計画を立案し、研究発表を実施した。

<プログラム>

第1回	12/2・3	開講式、オリエンテーション
第2回	12/9・10	研究手法の演習、研究計画作成
第3回	12/26・27	東京研修
第4回	1/20・21	報告会、修了式

(2) 自治体職員向け原子力研修講座（令和6年2月26日（月）・27日（火））

安田上級研究員が企画し、一般財団法人日本原子力文化財団とのタイアップ開催。全国の自治体職員を対象に、20自治体から42名が参加した。

26日は、東日本大震災・原子力災害伝承館の展示見学や語り部講話、フィールドワークといった研修プログラムを通じて震災・原子力災害への学びを深めた。

27日は、高村館長と安田上級研究員が講師となり、放射線や原子力防災についての講演を実施。講演後には安田上級研究員が進行役となり、避難計画の実効性に関して原子力防災チェックリストをもとにグループワークを実施した。

2/26 東日本大震災・原子力災害伝承館での研修の様子



2/27 ホテル福島グリーンパレス 2階 孔雀の間での講演の様子



(3) 双葉町・浪江町 実践研修プログラム（令和5年6月8日（木））

葛西常任研究員等が講師となり、株式会社ルネサンス地域健康推進部 14名、那智勝浦町役場職員 1名の計 15名が参加した。

東日本大震災・原子力災害伝承館及び請戸小学校の見学を通して、震災時に福島で何が起き、どのように向き合ってきたのかについての学びを深め、

当時の避難の様子を体感するために請戸小学校から大平山霊園までを徒歩で移動する実践訓練を実施した。

〈実施内容〉

- ・ 東日本大震災・原子力災害伝承館 見学
- ・ 震災遺構浪江町立請戸小学校 見学
- ・ 実践訓練（請戸小学校～大平山霊園）
- ・ 講話①：語り部講話
- ・ 講話②：双葉郡町民の経験談と教訓
- ・ 講話③：今、必要な防災まちづくりとは
- ・ ワークショップ

6章 調査・研究

1節 概要

1. 目的及びミッション

伝承館では、「調査・研究事業」を行っています。蓄積した研究成果については、伝承館の「研修」や「展示・プレゼンテーション」に反映させることを通じ、多くの方へ福島における原子力災害の教訓や現状を発信するとともに、収集した資料の体系化を図ることにより、福島の経験を後世に継承する「知の交流拠点」としての役割を果たしていく。

調査・研究事業の目的は復興を担う人材の育成を行い、被災地の復興を加速させるとともに、今後発生することが否定できない国内外の災害に対する防災・減災に寄与することである。

この目的を達成するため、3つのミッションを設定し、研究事業を推進している。

【目的を達成するためのミッション】

1 教訓の体系化

伝承館では、複合災害、特に原子力災害とそこからの復興過程に関する実態に係る資料を収集し、調査・研究を俯瞰的に行い体系化し、そこから得られる教訓の抽出を通じ、復興及び減災に寄与します。

2 教訓の発信

伝承館に蓄積・体系化された教訓を広く世界に還元するため、積極的な情報発信や調査・研究成果をもとにした専門的研修プログラムの構築や展示・プレゼンテーション事業への反映等広く発信します。

3 研究者の育成

大規模災害、広域災害・複合災害、特に原子力災害研究と復興研究の先駆者として、新たな知の体系化と、その学術的価値の確立を先導していく研究者、防災、減災、復興を担う人材を育成するとともに、広く福島に関心を抱く方々が集い学ぶことのできる知の拠点としての役割を果たします。

2. 研究体制（令和6年3月末時点）

伝承館における調査・研究事業は、これまで様々な分野で福島に係る研究を行ってきた館長及び上級研究員に常任研究員を加えた「文理融合」の研究体制により進めている。常任研究員に対しては館長・上級研究員がアドバイザーとなり、研究等のサポート・実績の管理を行っている。

また、全国の大学等の研究機関や国際機関、地元自治体、企業等との共同研究やシンポジウム開催等の連携を通じ、福島に想いを寄せる方々が集う拠点としての役割を果たしている。

- (1) 館長：1名
 - ・高村昇（令和2年度～）
長崎大学原爆後障害医療研究所 国際保健医療福祉学研究分野 教授
- (2) 上級研究員：3名
 - ・安田仲宏（令和2年度～）
福井大学附属国際原子力工学研究所 原子力災害・危機管理部門 教授
 - ・関谷直也（上級研究員）（令和2年度～）
東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター 教授
 - ・開沼博（上級研究員）（令和2年度～）
東京大学大学院情報学環 准教授
- (3) 常任研究員：5名
- (4) 客員研究員：27名

2節 常任研究員の取組

■大杉 遥 OSUGI, Haruka（令和5年4月～）

1. 研究キーワード
放射性廃棄物、理解醸成活動、科学技術コミュニケーション、対話・語り
2. 所属学会
日本原子力学会
3. 令和5年度の調査・研究
 - 3.1. 研究テーマ
福島第一原子力発電所の事故で発生した放射性廃棄物に関する研究
 - 3.2. 概要

2011年3月11日に発生した東京電力福島第一原子力発電所（以下、福島第一原発）の事故に伴い、燃料デブリ、汚染水、瓦礫および汚染水処理に用いた吸着塔などの放射性廃棄物が発生した。これらの放射性廃棄物は、事故を経験した原子炉から生じることから、従来の原子力発電所から発生する放射性廃棄物とは異なり、それらの処理・処分方法および管理・最終処分の方針は廃炉を進める中で調査結果を踏まえて決定される。福島第一原発の廃炉の方針は、廃炉の計画を示す東京電力HDの「中長期ロードマップ」により位置づけられているが、廃炉作業で発生する放射性廃棄物の最終処分場の議論は未着手であり、福島第一原発の廃止措置における、放射性廃棄物の処理・処分は課題の一つである。

放射性廃棄物の処理・処分の計画を実施するには、国・事業者・行政・地域住民や県内外の国民への情報発信、対話及び合意が重要となり、その際の情報を得て対話する機会が必要である。本研究では、事業者及び地元

住民等の福島第一原子力発電所の廃止措置に関する関心事を明らかにすることを目的に調査を実施した。

3.3. 研究内容

地元住民等及び事業者の福島第一原子力発電所の廃止措置に関する関心事を明らかにすることを目的に廃炉に関する対話会の記録誌及び電力会社が発行する廃炉情報誌の内容をKH Coder Version 3.Beta.07を用いて分析を行い双方の関心事を評価した。

地元住民の関心事については、原子力損害賠償・廃炉等支援機構主催により開催された住民意見のヒアリング活動の様子が記載された記録誌『ぼいすふるむふくしま』を用いた。対象の市町村は、廃止措置を行う事故炉の立地町である大熊町で2022年、2023年に開催された対話の記録を分析の対象にした。また、記録誌の選択理由は、対話会のテーマが福島第一原子力発電所の廃止措置であること、質疑だけでなく参加者の思いや考えも含まれているためである。

事業者の関心事は、情報誌『はいろみち』における事故を経験した電力職員へのインタビューが記載された特集である「あの日から」の第1回から第42回までの記事を用いた。また、記録誌及び特集の選択理由は、電力会社職員の個人の視点で事故時、事故後の経験、今後の課題、想いが記載されているためである。

3.4. 研究成果

対話会に参加した地域住民（大熊町住民）の発言からは、「廃炉に関する情報」及び「電力会社職員との対話や交流」への関心が確認された。電力会社職員の関心事は、廃炉情報誌内の電力会社職員へのインタビューが記載された記事を分析の対象とした。その結果「若手の電力会社職員に対して経験を継承する意識がある」及び「地域住民に対して安心して過ごしてもらいたい」という関心が明らかになった。

4. 令和5年度研究の全体像に対する認識・評価

今回の分析結果は、分析対象とした記録誌及び情報誌から得られる限られた情報であるため、より具体的に、対象を広く選択して偏りなく現状を把握していく必要がある。さらに、記録誌及び情報誌は、紙面の作成過程の中で編集がされており、参加者やインタビュー内容を地域住民及び電力職員の関心事であると言い切る事はできない点に留意する必要があると認識している。そのため、より偏りの少ない意見を収集し調査を行う。具体的には、地域住民及び電力職員へのアンケート調査及びヒアリングを実施することで意見の偏りを減らすことを検討する。

5. 令和6年度以降の研究計画

地域住民へのアンケート調査を実施する。対象は、福島県浜通り地域に関わりを持つ市民および地域住民とし、福島第一原発の廃止措置で発生する放射性廃棄物についてどのような関心があるか、また、福島第一原発の廃止措置に関する説明を行う機会（勉強会など）に参加したいと思うか、どのようなテーマに関心があるのかを明らかにすることを目的として、廃止措置に付随する放射性廃棄物に対する関心事、知識量及び情報収集方法についてアンケート調査を行う。さらに、アンケート結果を踏まえて、地域住民へのヒアリングを実施し、廃止措置に関する情報を得て対話をおこなうような勉強会などの機会づくりを行う。

日本原子力文化財団によるアンケート調査結果 [1] では、既存の原子力やエネルギー、放射線に関するイベントなどの情報提供に関して、「参加したいと思うイベントに当てはまるものがない」の回答者が6割を占めており、原子力に関する知識の普及活動の大きな課題であると評価されている。さらに、原子力やエネルギー、放射線に関する情報提供を行う際には、情報を得るためのきっかけづくり、分かりやすい説明を心掛けること、コンテンツの利用やイベントの参加方法を分かりやすくご案内することが重要であることが明らかになった。

本研究で開催する対話会及び勉強会における福島第一原発の廃止措置に関する情報発信では、参加者の「関心事」を明らかにすることでイベントへの参加のきっかけづくりになることが期待できる。

電力会社職員を対象としたアンケート調査としては、地域住民を参加対象とした廃止措置に関する勉強会や対話会に関心がある又は積極的に参加をしたいと考える職員のリスクコミュニケーションに関与した際の感情に着目した情報を取得・分析することを検討している。

【参考文献】

[1] 2023年度原子力に関する世論調査 調査結果のお知らせ（要約版）

[online] https://www.aec.go.jp/kaigi/teirei/2024/siryoi3/1-1_haifu.pdf

6. 成果・活動

- (1) 外部研究費の獲得状況
(なし)
- (2) 書籍（単著・分担執筆含む）
(なし)
- (3) 論文
(なし)
- (4) 口頭発表
(なし)

- (5) ポスター発表
(なし)
- (6) 社会貢献活動等
 - 1. 出前講義
 - ・ふたば未来学園高等学校「放射性廃棄物の処理処分と資源化」(講師) 2023年6月28日
 - ・福井大学「福島高校SSHと福井大学の交流会」(講師) 2023年10月5日
 - 2. 講演
 - ・敦賀原子力利用平和協議会「今やるべき原子力防災と廃棄物処理問題への挑戦」(講師) 2023年8月19日
 - 3. 企画・運営等
 - ・災害復興学会「ふくしまボイス」(企画・運営) 2023年9月23日
- (7) その他
(なし)

■葛西優香 KASAI, Yuka (令和4年4月～)

- 1. 研究キーワード
地域、まちづくり、防災、伝統芸能、継承、社会心理学
- 2. 所属学会
日本災害情報学会、日本災害復興学会、日本自然災害学会、地域安全学会、日本社会心理学会、地区防災計画学会
- 3. 令和5年度の調査・研究
 - 3.1. 研究テーマ
地方都市における祭と人
 - 3.2. 概要
一度、町民全員が一斉避難を強いられた浪江町において、地域のコミュニティがいかに戻り、その際に機能するのは何かという問題意識を持ち、浪江町において調査を開始した。調査を継続する中で、住民は、神社を再建し、そこで行われる祭や伝統芸能の取り組みを復活させ、住民同士のつながりの復活に向けて取り組み続けていることが明らかとなった。地域のつながりを復活する上で、祭・伝統芸能はどのような機能を果たしているのかを明らかにすることを目的に調査を続けた。
 - 3.3. 研究内容
浪江町を主なフィールドとし、各芸能保存会の活動現場や祭の実施場所における聞き取り調査、参与観察を継続的に実施した。令和4年度から継

続し、延べ約 90 名の住民に調査を行った。震災前から継続的に活動に関わっている住民、震災後に関わり始めた住民、関わらなくなった住民などそれぞれの立場の住民に対して、祭や伝統芸能との関わり方を問うた。さらに生活にいかにつながっているかを把握するため、地域との関わりに関する質問項目も設け、聞き取りを行った。参与観察においては、関わる人の言動、その言動による地域への作用を観察した。

3.4. 研究成果

祭や伝統芸能に関わる住民に対して、聞き取り調査と参与観察を継続することにより、多様な関わり方が存在していることが明らかとなった。祭や伝統芸能を「スル」人、「ミル」人、「サンカスル」人、「ヒキツグ」人、「ニナウ」人とそれぞれの関わり方が現在の祭と伝統芸能の形を創り、さらには、地域内のつながりの形成に寄与していることが明らかとなった。また、震災前からの居住者と震災後に居住し始めた住民をつなぐ唯一の存在が祭と伝統芸能であり、新しく生まれた取り組みでもなく、内発的に復活した発展要素であることが確認できた。

4. 令和5年度研究の全体像に対する認識・評価

令和4年から引き続き調査を行ってきた結果、祭と伝統芸能の機能を言語化し、令和6年度の研究活動、文章化、企画展への反映につながる道筋が見えた。よって、自身の評価としても効果的な研究活動となった、と捉えている。一方で、論文化へ至るまでの理論化をなかなか形にできず、長く迷いが生じた。よって、理論化への検討をよりスピード感を持って行えるよう精進してまいりたい。

5. 令和6年度以降の研究計画

令和5年度にまとめたことを浪江町以外の7町村と飯館村にフィールドを広げ、調査を行う。調査で得られた結果を自然災害学会からいただいた外部資金を活用させていただき、冊子の作成、さらに令和6年12月～令和7年3月末に向けて企画展へと反映し、調査結果をまとめ上げる計画となっている。

6. 成果・活動

(1) 外部研究費の獲得状況

- ・日本自然災害学会・令和4年度第2回災害調査補助制度「福島県双葉郡の神社・民俗芸能の再興現状調査」〔研究代表者〕【継続】

(2) 書籍（単著・分担執筆含む）

（なし）

(3) 論文

(なし)

(4) 口頭発表

- ・ 葛西優香・関谷直也、集合状態と集団の中間的存在—新しいシステムの誕生を通じて—、第42回日本自然災害学会学術講演会（2023年9月17日、金沢大学）
- ・ 葛西優香・関谷直也、住民自治組織の形成過程と「祭」再興の関係性—双葉郡浪江町の事例に着目して—、日本災害情報学会第27回学会大会（2023年10月28日、福島学院大学／コラッセふくしま）
- ・ 葛西優香・関谷直也、コミュニティ生成過程への着目—双葉郡浪江町の事例を通じて—、日本災害情報学会第28回学会大会（2024年3月16日、東京大学大学）
- ・ 葛西優香・高原耕平・岩本裕貴・関谷直也、「ふくしまボイス」報告—安全な対話の場は浜通りに何をもちたらすか—、東日本大震災・原子力災害第2回学術研究集会（2024年3月19日、コラッセふくしま）

(5) ポスター発表

- ・ 葛西優香、住民自治組織の形成—祭に関わる活動に着目して—、令和5年度環境創造センター成果報告会（2023年10月3日、コミュニティ福島）
- ・ 葛西優香、8町村の盆踊り継承過程、エフレイ・フォーラム—環境動態評価を活かしたまちづくり—（2024年2月23日、いわき芸術文化交流館アリオス）

(6) 社会貢献活動等

1. 出前講義

- ・ 福島高校「今、ここで考える、まちづくり」2023年6月24日
- ・ 関東学院大学「地域創生特論（福島）震災・原子力災害の伝承、防災」2023年10月5日
- ・ 北海道教育大学「【現代日本社会・文化論Ⅱ】東日本大震災・原子力災害について学ぶ」2023年10月18日
- ・ 横浜市立幸ヶ谷小学校「防災授業」2023年12月4日

2. 講演

- ・ 原子力損害賠償・廃炉等支援機構「廃炉の対話」（ファシリテーター）2023年7月2日
- ・ 福島県危機管理部「自主防災組織リーダー研修会」2023年7月22日
- ・ 防災推進国民大会2023実行委員会「ぼうさいこくたい2023 in KANAGAWA」（パネリスト）2023年9月17日
- ・ 日本農学アカデミー「東日本大震災がもたらした食料問題—福島県の現状と課題—」（パネリスト）2023年11月11日

- ・(公財) 福島イノベーション・コースト構想推進機構・ふくしま 12 市町村移住支援センター「未来ネットワークふくしま移住セミナー」2024 年 1 月 13 日
- ・福島県食品生活衛生課「食品検査結果に関するリスクコミュニケーションセミナー」(ファシリテーター) 2024 年 1 月 16 日
- ・福島国際研究教育機構「F-REI まちづくりに向けたワークショップ」(ワークショップ参加) 2024 年 2 月 22 日
- ・「新しい東北」官民連携推進協議会「“ふるさと愛”プロジェクト in J-VILLAGE」(ゲスト登壇) 2024 年 2 月 13 日
- ・特定非営利活動法人ビーンズふくしま・ふくしま母子サポートネット「ママカフェ 防災講座」2024 年 3 月 20 日

3. 委員

- ・浪江町景観計画策定委員会・委員、2023 年 11 月～
- ・福島県防災基本条例(仮称)検討委員会・委員、2024 年 3 月～

(7) その他

1. メディア掲載

- ・ぎょうせいオンライン「地域の助け合いが自分と家族の命を守る第一歩！～「地区防災計画」の作り方～」(連載) 2023 年 4 月～2024 年 3 月
- ・河北新報「福島・浪江町に移住の葛西さん 地域の営み再生に伴走 助け合いの防災構築」2023 年 9 月 9 日
- ・北海道新聞「水曜討論 震災の記憶どう伝える」2023 年 9 月 11 日
- ・福島民報「浜通りの未来を考える 「ふくしまボイス」福島県双葉町で開催 復興や複合災害伝承、住民ら意見交換」2023 年 9 月 24 日
- ・北海道新聞「北海道教育大学で福島に関わる講義」2023 年 10 月 19 日
- ・福島テレビ「人の営みが失われた町へ移住 コミュニティ再生を見つめる 研究員 災害時、心を救うのは地域のつながり【福島発】」2024 年 3 月 11 日
- ・福島民報「盆踊り継承パネル展」2024 年 3 月 17 日

■ 静岡健人 SHIZUMA, Taketo (令和 4 年 4 月～)

1. 研究キーワード：

広域避難者、災害時要配慮者、災害伝承施設、社会心理学的アプローチ

2. 所属学会：

日本リスク学会、日本応用心理学会、日本社会心理学会、日本災害復興学会、日本災害情報学会、日本自然災害学会、地区防災計画学会、東北都市学会、日本都市学会

3. 令和5年度の調査・研究

3.1. 研究テーマ

- (1) 効果的な災害伝承に関する研究—来館者アンケートの内容分析—
- (2) 広域避難者に対する情報支援に関する研究—市町村の広報誌、ダイジェスト版新聞、ふくしまの今が分かる新聞を対象とした内容整理—

3.2. 概要

(1) 効果的な災害伝承に関する研究

東日本大震災・原子力災害の被災地や被災者等が経験したことや教訓を継承することは、今後の災害に備えるために重要である。令和4年度から引き続き、災害伝承施設の来館者の体験を「アンケートの自由記述」から分析した。

(2) 広域避難者に対する情報支援に関する研究

福島県内外の避難者に提供されている「避難者支援情報や復興の動向」に関する情報の特徴を整理することは、今後の大規模災害時の情報提供のあり方を考えるうえで重要である。令和4年度に収集した「避難者向けダイジェスト版新聞」及び「類似の関連資料」の内容整理を行った。

3.3. 研究内容

(1) 効果的な災害伝承に関する研究

東日本大震災以降、災害伝承の大切さが見直されている。本研究では、災害伝承施設として「東日本大震災・原子力災害伝承館（以下、伝承館）」を取り上げ、伝承館に来館した人の体験内容に着目する。本研究の目的は、伝承館に来館した人の体験内容とその体験に対する満足度との関連から、伝承館での体験に対してどのような認識を持ったのか（＝認識の多様さ）を明らかにすることである。具体的には、伝承館の開館当初から実施している「来館者アンケート」の、2022年度までの展示満足と自由記述を分析に用いた。なお、分析対象期間内には、全数調査期間（2021年（令和3年）9月から2023年（令和5年）3月）までが含まれる。

(2) 広域避難者に対する情報支援に関する研究

東日本大震災・原子力災害による避難者に対して、福島県は様々な媒体を用いた情報支援を展開している。避難者意向調査（避難者支援課）によると、これらの避難元自治体（県・市町村）からの情報が、避難者にとっての情報源となっていた。このことから、本研究では、福島県・避難元市町村が提供している情報媒体に着目する。本研究の目的は、避難者が広報物から、原発賠償情報、復興状況、行政情報、放射線リスク情報、住宅情報等を入手可能であったのかを明らかにすることである。具体的には、「避難者向けダイジェスト版新聞（地元新聞のダイジェスト版）」、「ふくしまの

今が分かる新聞」、「広報誌（双葉郡8町村）」を分析の対象とした。なお、紙幅の都合から平成25年度分の結果を報告する。

3.4. 研究成果

（1）効果的な災害伝承に関する研究

分析期間のアンケートの回答率は25.2%であり、そのうち自由記述記入率は28.8%であった。また、本研究で分析の対象とする自由記述記入者の展示満足度は「満足6,454人、普通920人、不満足386人、未回答291人」であった。なお、自由記述内容の分析にはKH Coder3を用いた。

来館者の自由記述によく出てくる言葉を分析した。展示への満足度が低い人（不満足）では、「伝承館の展示内容に工夫が必要である」といったネガティブな意見（たとえば、「悲惨さが伝わらない」、「事故の反省が感じられない」）が目立ち、一方で満足度が高い人（満足）では、「防災学習的視点・災害や復興学習的からの気づき、記憶の想起」といったポジティブな意見（たとえば、「自分事として考えて備えないといけないと感じた」、「当時のことや感情を思い出した」）が目立った。以上のことから、多様な受け止め方や感じ方がある事が明らかとなった。

（2）広域避難者に対する情報支援に関する研究

避難者意向調査で避難者が行政に希望する情報を基にしたカテゴリに基づき、「避難者向けダイジェスト版新聞」、「ふくしまの今が分かる新聞」、「双葉郡8町村の広報誌」の内容分析を行った。各媒体で割合の違いはあるが、カテゴリレベルでみると、希望する情報を入手可能であったことが明らかとなった。一方で、情報形式に共通の特徴がみられた。たとえば、1人称で書かれた記事や個人（避難者など）にフォーカスした記事や情報が含まれていた。広報誌では「おおくまふれあい通信」等、避難者向けダイジェスト版新聞では「ふくしまは負けない/明日へ」等、ふくしまの今が分かる新聞では「読者の声」等である。

4. 令和5年度研究の全体像に対する認識・評価

（1）効果的な災害伝承に関する研究

ここまでの研究成果に関しては、令和4年度（日本リスク学会）と令和5年度（日本応用心理学会）に学会での発表を行っている。令和5年度は、本報告書に掲載した満足度別の分析結果を報告している。

また、令和5年度の分析結果から、福島で起きた事の伝承については、何を展示するのも大事だが、展示されている情報・展示されていない情報があること、様々な立場で現実の見え方が異なること等、「視点」を提供することも必要となってくると考える。

（2）広域避難者に対する情報支援に関する研究

ここまでの研究成果に関しては、令和5年度に学会等での発表を行っている（日本自然災害学会、日本災害情報学会、日本リスク学会、東日本大震災・原子力災害学術研究集会、震災問題研究交流会）。

また、令和5年度の分析ではカテゴリレベルでの情報の突合せを行ったが、より詳しい情報を入手したい人がいたか等は、生活再建支援拠点等に寄せられた、相談事例と突き合わせて、より細かなカテゴリでの検討が必要であると考えます。

5. 令和6年度以降の研究計画

「(1) 効果的な災害伝承に関する研究—来館者アンケートの内容分析—」の課題を踏まえて、令和6年度以降は災害関連施設における学習行動に関する研究を実施する。具体的には、来館者の体験の質の向上を図るために、「来館者ノートの相互作用性を活用した情報提供の効果（気づき、共感等）」、「東日本大震災・原子力災害に関する“結果（たとえば、自主避難）の情報”と“過程（たとえば、自主避難に至った経緯）の情報”を並列に示すことによる情報提供の効果（興味・関心、葛藤等）」を心理実験の手法を用いて検討し、教育ツール（仕掛け）の開発を試みる。また、令和5年度に、山田常任研究員との共同研究として、福島県内居住者の東日本大震災・原子力災害に関する情報探索行動の調査を実施している。令和6年度は、その研究を継続し、広い視点から震災伝承のあり方もあわせて検討する。

「(2) 広域避難者に対する情報支援に関する研究—市町村の広報誌、ダイジェスト版新聞、ふくしまの今が分かる新聞を対象とした内容整理—」の課題を踏まえて、令和6年度以降も引き続き、広域避難者に対する「情報提供」支援に関する研究を行う。具体的には、支援の情報、復興動向の情報、放射線関連の情報等のカテゴリを「情報の形式（たとえば、物語文・説明文、統計情報、解説）」から整理し、どのカテゴリの情報が、どのような形で避難者に提供されていたのかを明らかにする。さらに、それらの情報が避難者等の心的影響過程に及ぼした影響（情報のポテンシャルについての研究）について実験的方法を用いて検討する。加えて、双葉郡8町村の帰還者、避難者に対して、現在までに受け取った広報誌・新聞等について、事実関係のヒアリングを行う（情報の実際の影響についての研究）。主な質問内容は、「何が送られてきたか」、「送られてきたものを読んでいたか」、「何処から、どのような方法で送られてきたか」、「届いた情報以外の情報も調べたか（避難者支援ブログ等）」を想定している。これらの研究から、避難者は情報支援によって何をなす事ができたのかを検証する。

6. 成果・活動

(1) 外部研究費の獲得状況

- ・日本自然災害学会・令和5年度第2回災害調査補助制度「東日本大震災・原子力災害による避難先での避難行動要支援者名簿の作成状況及び課題についての調査」〔研究代表者〕【新規】
- (2) 書籍（単著・分担執筆含む）
（なし）
- (3) 論文
 - ・中村満寿央・田村太郎・菅磨志保・静間健人、被災世帯を対象とする支援需要評価に関する研究—生活再建への移行期における被災者生活実態調査の実践から—、日本災害復興学会論文集、No. 23：31-42、2024（分担執筆）
【査読有】
 - ・静間健人、要配慮者概念の拡張—脆弱性とレジリエンスの観点からの整理—、日本都市学会年報、57巻【査読有】（※掲載決定）
- (4) 口頭発表
 - ・静間健人、災害伝承施設における来館者体験の分析—東日本大震災・原子力災害伝承館の2022年度までの来館者アンケートを用いて—、日本応用心理学会第89回大会（2023年8月26日、亜細亜大学）
 - ・静間健人、原発避難者に向けた避難元広報誌の情報の変遷、第42回日本自然災害学会学術講演会（2023年9月17日、金沢大学）
 - ・静間健人、福島県の広域避難者に届けられた情報媒体の内容分析—地元紙のダイジェスト版を対象として—、日本災害情報学会第27回学会大会（2023年10月28日、福島学院大学）
 - ・野元颯馬・土田昭司・河野和宏・Chayanee WONGSURIYANAN・浦山郁・静間健人・Titaya SARARIT、地震対策促進のための仮想現実および拡張現実を用いた体験型学習アプリケーション開発の試み、日本災害情報学会第27回学会大会（2023年10月28日、福島学院大学）
 - ・静間健人、原子力防災における要配慮者の整理、日本都市学会第70回大会（2023年11月4日、小田原UMECO）
 - ・静間健人、復興住宅における生活実態と主観的評価、日本行動科学学会 第39回ウィンターカンファレンス In 琵琶湖・湖西（2024年2月18日、琵琶湖湖畔おごと温泉 湯の宿 木もれび）
 - ・静間健人、ふくしまの民俗芸能に関する情報の発信—3.11後の地元新聞を分析の対象として—、東日本大震災・原子力災害第2回学術研究集会（2024年2月19日、コラッセふくしま）
 - ・静間健人、東日本大震災・原子力災害の避難者への情報支援の内容整理—自治体広報誌・ダイジェスト版新聞・避難者向け情報紙を対象として—、第10回震災問題研究交流会（2024年3月20日、早稲田大学・オンライン）

- (5) ポスター発表
 - ・ 静間健人、アウトリーチの必要性—フレーミング理論を災害伝承に応用するために—、令和5年度環境創造センター成果報告会（2023年10月3日、コミュタン福島）
 - ・ 静間健人、東日本大震災の避難者への情報支援の内容分析—ふくしまの今が分かる新聞を対象として—、第36回日本リスク学会年次大会（2023年11月11日、北海道大学）
- (6) 社会貢献活動等
(なし)
- (7) その他
 1. メディア掲載
 - ・ 関西大学大学案内 2024 (pp. 32-33) 『自分の道を拓き続ける Interest の行方。—卒業生の Interest 「大震災の経験から何を教訓とし、何を未来に伝えるのか。その答えは、住民の声の中にある。」』

■山田修司 YAMADA, Shuji (令和4年4月～)

1. 研究キーワード
哲学・倫理学、科学社会学・科学技術史、リスク、防災、移動
2. 所属学会
科学技術社会論学会、日本東アジア実学研究会、日本科学哲学会、東北都市学会、日本都市学会、応用哲学会、東北哲学会、東北大学哲学研究会
3. 令和5年度の調査・研究
 - 3.1. 研究テーマ
教訓の継承に向けた移動論的研究
 - 3.2. 概要
いわゆる東日本大震災・原子力災害と東京電力福島第一原子力発電所事故（以下、「原発事故」と略）は、長期・広域の「避難」をもたらした。原発事故による避難指示区域では、時間経過とともに様々な主体による取り組みによって「解除」が行われ、法制的には居住が可能となる地域は拡がり、また生活のためのインフラ・ストラクチャーの整備も前後して進められている。一方で、長期・広域の避難のなかで人々は、戻る・戻らないといった帰還判断をせまられつつも、生活形式として移動という側面をあらわにしている。避難先と被災元居住地との多拠点での生活や、帰還せずとも被災元居住地との関わりを持ち続けるといった、移動する人々の動態は、長期・広域の「避難」の延長線にあるといえる。

移動のなかの生活は、人の復興と地域の復興とを総体としてとらえることを難しくする一方で、鍵となるように思われる。被災地には、当時の被災者だけでなく、移住者や復旧作業従事者、観光客などの様々な人が訪れ、経験を積み重ねる地域となっている。

そこで本研究では、震災伝承とよばれる営みに着目する。震災伝承活動がもつ被災地をはじめとする地域社会における意義と役割を解明することによって、人の復興と地域の復興とを接続しうる視点の提供を試みる。

3.3. 研究内容

本研究では、人、モノ、施設、場所といった震災伝承の担い手に着目して理論的研究と経験的研究を行った。理論的研究は令和4年度に引き続き、文献の収集・検討から震災伝承の理論的条件について考察した。経験的研究では、福島県内避難先コミュニティのヒアリングを継続しつつ、今年度は震災伝承活動従事者へのヒアリング及び質問紙調査による定量的研究と、福島県内居住者へのWEB調査に着手した。なお、震災伝承活動従事者への調査は東日本大震災・原子力災害伝承館客員研究員でもある長崎大学・松永妃都美助教との共同研究であり、福島県内居住者へのWEB調査は伝承館・静間健人常任研究員との共同研究である。

3.4. 研究成果

理論的研究では、震災伝承を記憶実践とみなし、先行研究での戦争や災害についての集合的記憶研究、ミュージアム・スタディーズ、社会理論としての空間論的転回や移動論的転回から考察した。これらを通じて、震災伝承はハコモノとして本質的に過去に固定され当事者に閉じた営みではなく創造的な契機を内在していること、そして公共性・開放性が重要な条件であることを指摘した。これらは査読論文として出版される。

経験的研究については、①県内避難者に対してライフヒストリーおよび生活・居住実態についての半構造化面接を行い、継続している。被災元居住地への関わりについて、子ども・孫世代や墓といった将来に関する態度が、関わりの継続要因の可能性として観察された。②静間常任研究員との共同でのWEB調査では、令和6年3月13日～15日にかけて委託調査会社の登録モニターから、福島県内居住者を対象に性別・年齢・地域の人口構成比で839件の回答を取得した。生活実態や震災伝承への態度、情報接触等を項目と設計し、現在解析を進めているが震災伝承施設の利用意向について重回帰分析などを予定している。③松永氏との震災伝承活動従事者への共同研究では、いわゆる語り部を対象に、令和5年11月～12月にかけて4名への半構造化面接を実施した。また令和6年1月～2月にかけて語り部団体等への協力により語り部個人にアンケート用紙を配布し、2月17日時点で30件の回答を得ることができた。このデータについては暫定的

に活動実態の記述統計と、継続意欲・満足度を従属変数とした統計解析の結果を伝承館年度末報告会において報告した。

4. 令和5年度研究の全体像に対する認識・評価

令和4年度までの理論的研究と定性的な調査に加えて、令和5年度は定量的な調査・研究に着手することができた。共同研究というかたちで方法的な知見を深めることができ、伝承館ミッションに貢献しうるような、数量的な指標を用いた震災伝承活動の継続に向けた制度的な支援のあり方へ、定性・定量の両方から研究成果に結びつける弾みをつけることができた。

伝承館の外部との関係では、学会報告を通じて他機関や異分野の研究者から意見研究課題について知見を深めることができた。また伝承館研究員として現地のカウンター・パートとなり、研究成果のとりまとめとして書籍の出版や競争的研究費の申請を見据えた研究計画の準備など、研究の協力体制を構築できている。

研究成果として査読論文2件（出版済1件、掲載決定1件）に結びつけることができ、また科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）に研究代表者として採択された。対外的にも評価されうるような研究の遂行と展開を進められていると思われる。ほか、研究の一環で、松永氏と記録証言映像の記録を行い、国際的な発信に向けて準備を進めている。

5. 令和6年度以降の研究計画

令和6年度は、災害からの復興や地域社会の継続に寄与しうるような震災伝承の社会的要件を調査・検討する。令和5年度の活動を継続し発展させた定性的な調査と定量的な調査を進め、研究成果へと結びつける。具体的には、まず昨年度末に実施した静間常任研究員との共同研究であるWEB調査データの統計解析を進める。震災伝承施設の利用意向や価値観とモビリティとを関連付け、要因を明らかとする。これは、令和6年10月に開催予定の日本都市学会で報告し、査読論文への投稿を計画している。ほかWEB調査の記述統計は、モビリティに着目した論点として理論を実質的に肉づける材料に用いて、『東北都市学会研究年報』へ投稿する査読論文、令和6年6月開催予定の応用哲学会での報告準備を進めている。次に、松永氏との共同研究である震災伝承活動従事者への質問紙調査は、改めて県内語り部団体に協力を依頼し、統計解析にたえうるサンプルサイズを目指している。その後にデータの統計解析を行い、論文投稿等をおこなう。

3年目となることから調査・研究を取りまとめ、学会での特別セッションの企画や書籍の出版等を、伝承館内外の研究者との協力の体制のもとで計画している。また学術的成果に加えて、調査・研究の経過で得られた成果を伝承館の展示等の社会的に還元できるような媒体の検討・準備を進める。

6. 成果・活動

(1) 外部研究費の獲得状況

- ・公益財団法人上廣倫理財団・上廣倫理財団令和4年度研究助成「道德の物質的転回による設計論の構築に向けた技術哲学的考察」2023年3月～2024年2月〔研究代表者〕【継続】
- ・日本学術振興会科学研究費助成事業・研究活動スタート支援「構成的な道德的行為者性の把握に向けた移動研究の技術倫理的展開（課題番号：23K18617）」2023年8月～2025年3月〔研究代表者〕【新規】

(2) 書籍（単著・分担執筆含む）

（なし）

(3) 論文

- ・山田修司、震災伝承施設における資料化とその概念的検討、日本都市学会年報、56巻：193-202、2023【査読有】
- ・山田修司、観客性に着目した震災伝承の理論的考察、日本都市学会年報、57巻【査読有】（※掲載決定）

(4) 口頭発表

- ・山田修司、移動の機能と主体の技術哲学的考察、応用哲学会第15回年次研究大会（2023年4月23日、金沢大学）
- ・山田修司、倫理的に受容可能な移動の予備的考察、東北都市学会2023年度大会（2023年9月2日、弘前大学）
- ・山田修司、観客性に注目した震災伝承の理論的考察、日本都市学会第70回大会（2023年11月4日、小田原 UMECO）
- ・山田修司、受容可能なリスクと感情のナラティブに関する検討、東日本大震災・原子力災害第2回学術研究集会（2024年3月19日、コラッセふくしま）

(5) ポスター発表

- ・山田修司、展示から創造へ：震災伝承の認識論モデルの考察と提案、令和5年度環境創造センター成果報告会（2023年10月3日、コミュタン福島）

(6) 社会貢献活動等

（なし）

(7) その他

（なし）

■青砥和希 AOTO, Kazuki（令和4年4月～令和6年3月）

1. 研究キーワード

地域アイデンティティ、教育復興、サードプレイス、人文地理学、教育社会学

2. 所属学会

コミュニティ政策学会、日本 NPO 学会、日本社会教育学会

3. 令和 4 年度の調査・研究

3.1. 研究テーマ

東日本大震災・原子力災害における教育復興—複数の主体による地域案伝
ティティの再構築過程の研究

4. 成果・活動

(1) 外部研究費の獲得状況

(なし)

(2) 書籍（単著・分担執筆含む）

(なし)

(3) 論文

(なし)

(4) 口頭発表

(なし)

(5) ポスター発表

- ・青砥和希、福島県における高校生向け震災伝承プログラムの可能性と課題、
令和 5 年度環境創造センター成果報告会（2023 年 10 月 3 日、コミュタン
福島）

(6) 社会貢献活動等

1. 出前講義

- ・宇都宮大学「NPO 論」2023 年 6 月 1 日
- ・福島学院大学「人間関係形成論」2023 年 7 月 6 日
- ・福島県立白河高等学校「総合的な探究の時間」2023 年 7 月 7 日
- ・国立那須甲子青少年自然の家「総合的な探究の時間」2023 年 7 月 27 日
- ・宮城学院女子大学「コミュニティビジネス論」2023 年 12 月 4 日
- ・宮城学院女子大学「コミュニティビジネス論」2023 年 12 月 11 日

2. 講演

- ・福島県環境創造センター「ふくしまナラティブスコラ」2023 年 8 月 6 日
- ・福島県議会「議員勉強会」2023 年 9 月 14 日
- ・立命館大学「家族応援プロジェクトシンポジウム」（パネリスト）2023 年
9 月 23 日

- ・人と防災未来センター「ふくしまナラティブキャラバン@人と防災未来センター」（ファシリテーター）2023年11月26日
- ・福島県生活環境部環境共生課「（仮称）福島県カーボンニュートラルの推進等に関する条例」検討のための県内大学生による対話型ワークショップ」2023年12月2日
- ・福島県教育庁「教育フォーラム」（コメンテーター）2023年12月22日

3. 委員

- ・福島県総合計画審議会県民懇談会
- ・福島県総合計画審議会

(7) その他

1. メディア掲載

- ・ふくしま FM「FUKU-SPACE「FUKUSHIMA KEY PERSON」」2023年4月13日

3節 報告会等

1. 調査・研究部門活動報告会

伝承館の調査・研究部門の活動成果を一般の方向けに発信することを目的として、館長、上級研究員、常任研究員が令和5年度の活動内容を発表した。

日時：令和6年3月18日（月）13：00～16：45

場所：コラッセふくしま 中会議室401

発表者	活動内容
館長 高村昇	「福島における環境放射能、放射線リスクコミュニケーションとリスク認知の変遷」
上級研究員 安田仲宏	「東日本大震災・原子力災害における放射線防護対策の検証～次の世代に伝承すべきこと～」
上級研究員 関谷直也	「東京電力福島第一原子力発電所事故に関連したリスク認知に関する国際比較研究」
上級研究員 開沼博	「点を線でつなげるために」
常任研究員 葛西優香	「祭の復活過程とコミュニティの関連性—福島県双葉郡浪江町の事例を通じて」
常任研究員 静間健人	「効果的な災害伝承に関する研究—来館者アンケートの内容分析—」 「広域避難者に対する情報支援に関する研究—市町村の広報誌、ダイジェスト版新聞、ふくしまの今が分かる新聞を対象とした内容整理—」
常任研究員 山田修司	「教訓の継承へ向けた移動論的研究」
常任研究員 大杉遥	「福島第一原子力発電所の廃炉と放射性廃棄物の課題に関する研究」

2. 有識者懇談会調査・研究専門部会

調査・研究事業の質の確保・向上を図るため、専門的な見地からの意見、助言を得ることを目的として、東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する

有識者懇談会に調査・研究専門部会を設置しており、令和6年3月27日（水）に福島市のコラッセふくしまで当専門部会を開催した。

委員構成（第1期 令和5年3月～令和7年3月）

所属・役職	氏名
福島大学共生システム理工学類 教授	川崎 興太
福島大学共生システム理工学類 客員教授	小沢 喜仁
福島県立医科大学総合科学教育研究センター 特任教授	後藤 あや
東洋大学国際学部国際地域学科 教授	藤本 典嗣

3. 東日本大震災・原子力災害 学術研究集会

3月19日、20日の2日間にわたり、伝承館における調査・研究活動の推進及び人材育成のため、東日本大震災及び原子力災害に関わる研究者等が各研究活動の発表を行う「東日本大震災・原子力災害 第2回学術研究集会」を開催した。2日間で89名からの発表があり、200名以上の参加があった。

会場のコラッセふくしまには、全国から東日本大震災や原子力災害に関わる研究者が集まり、原子力災害とまちづくり、風評被害、行政対応や、放射線の影響など多様なテーマの発表が行われた。また、各セッションにおいて活発な議論が行われた。

1日目	2日目
○日時：令和6年3月19日（火） 9：30～18：00	○日時：令和6年3月20日（水・祝） 9：30～16：30
○場所：コラッセふくしま	○場所：コラッセふくしま
○発表者：53人	○発表者：36人



4. 福島県知事に活動内容を報告

日時：令和5年11月22日（水）16：40～17：00

常任研究員5名が内堀雅雄福島県知事を訪問し、研究活動を報告した。高村昇館長、関谷直也上級研究員、福島イノベーション・コースト構想推進機構 戸田光昭専務理事が同席した。



4 節 福島国際研究教育機構（F-REI）との連携

伝承館が共同研究機関として参加する F-REI 委託研究

伝承館はF-REIが実施する委託研究事業のうち3事業に共同研究機関として参加している。

(1) 令和5年度「原子力災害からの復興に向けた課題の解決に資する施策立案研究」委託事業

ア. 原子力災害に関するデータや知見の集積・発信（原子力災害医療科学）
代表機関：長崎大学

概要：放射線リスク評価など原子力災害医療科学に関する知見を集積・分析し、国際放射線防護委員会（ICRP）、国際原子力機関（IAEA）等の国際機関をはじめとする国内外の関連研究機関と連携し、国際的な防災・減災の指針の策定に貢献する。

イ. 原子力災害に関するデータや知見の集積・発信（大規模災害とデータサイエンス）

代表機関：東京大学

概要：原子力災害に関するデータや知見の集積の観点から、「福島の経験」に関してマスメディア、行政広報、ソーシャルメディアが行った情報発信のデータを収集するとともに、それらの情報が人の行動・心理に与えた影響を分析することで、大規模災害時の情報提供のあり方に関する教訓を抽出する。

(2) 令和5年度「福島浜通り地域におけるまちづくり研究及びラーニング・コミュニティハブ整備」委託事業（テーマ（2）福島浜通り地域におけるラーニング・コミュニティハブの整備）

ア. コミュニティ&コミュニケーションの場の創出に関わる実践研究

代表機関：東京大学

概要：福島浜通り地域に、F-REI を核とした学び・気づきのコミュニティ&コミュニケーションの場を創出し、将来の地域の担い手となる若者による未来課題の解決を実現する。

5節 その他

環境創造センター成果報告会

日時：令和5年10月3日（火）11：00～16：50

環境創造センターで開催された成果報告会にて高村館長が基調講演、常任研究員がポスター発表を行った。



7章 イベント・広報

1節 イベント

1. セタイイベント

日時：令和5年6月14日（水）～7月10日（月）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館1階エントランスホール

来館者に福島へのメッセージや願いを短冊に書いていただき、飾ることで、震災・復興について考える契機となるよう「セタイイベント」を開催した。イベント期間の後半には、双葉町両竹地区から採取した竹を使用した。

6月26日には、浪江町立なみえ創成小学校の児童を招待し、それぞれの願いが書かれた短冊の飾りつけを行った。

また、7月8日・9日には、浪江消防署の協力をいただき、起震車による地震体験や応急担架、三角巾の作成体験、消防士のユニフォーム試着、消防車両の展示などを行った。2日間合わせて200名近くの方がブースを訪れた。



2. 常磐線沿線舞台芸術祭「日没を祭れ2023」

日時：令和5年8月5日（土）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館1階エントランスホールほか

詩人和合亮一氏と書道家千葉清藍氏らによるアートパフォーマンスや、100名を超える混声合唱団の演奏会が開催された。



3. ふくしま防災・伝承パーク

日時：令和5年9月24日（日）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館1階エントランスホールほか

福島県と連携した防災イベント「ふくしま防災・伝承パーク」を開催した。非常食の試食、防災レンジャーショーなどを通じ、家族で楽しく防災を学んでいただくとともに、県内5市町村の観光・産品PRブースも出展し、ふるさとの魅力に触れてもらう機会とした。

また、国際的に活躍する海外音楽家4名によるコンサートも同日開催し、多くの観客を魅了した。



4. Out of KidZania in ふくしま相双 2023「伝承館アテンダントの仕事」

日時：令和5年9月30日（土）、10月1日（日）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館

相双地方振興局主催のイベントにサブメイン会場として協力。伝承館での職業体験には小学4年～中学2年生7人が参加した。震災と原子力災害を後世に伝え、防災につなげるという当館の役割を理解し接客する「アテンダントの仕事」に取り組んだ。



5. チェルレウム・マーレ伝承館コンサート

日時：令和5年11月6日（月）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館1階エントランスホール

ア・カペラ、宗教曲を中心に幅広いレパートリーを持ち、東日本大震災後は福島県の子どもたちのためのプログラム、川内村などを支援するチャリティーコンサートを行っている団体が神戸市から来訪し、声楽アンサンブルコンサートを開催した。



6. 請戸小学校のピアノでコンサート

日時：令和5年11月26日（日）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館1階エントランスホール

浪江町の震災遺構「請戸小学校」のピアノを同町出身のピアニスト吉田昂城よしだこうきさんが演奏するコンサートが開かれた。震災後、錆により劣化していた弦を張り替えた後の最初の演奏会となった。



7. 3.11メモリアルイベント

日時：令和6年3月11日（月）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館

福島県と連携し、東日本大震災・原子力災害の発生から13年目となる3月1日に、「3.11メモリアルイベント」を開催した。

○本年度の企画展「人が語る原子力災害」で証言などを展示している俳優の横田龍儀さん（川内村出身）、富田望生さん（いわき市出身）が来館し、トークセッションにそれぞれ登壇した。トークの内容は菅野愛希さんにグラフィックレコーディングしていただいた。

○台北フィル楽団員による弦楽四重奏コンサートの開催

○当館職員・横山和佳奈（浪江町立請戸小学校出身）が、構成劇「請戸小学校物語」に出演。津波避難の状況や教訓を伝え、同じステージで双葉町出身の箏奏者・大川義秋さんらと共演した。

○追悼花火の打ち上げ、キャンドルナイト等を実施。

<トークセッション> 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階研修室

第1部「家族との絆・支えあうこと」10：30～11：15

東日本大震災・原子力災害伝承館 館長 高村 昇

俳優 横田 龍儀 氏（川内村出身）

ファシリテーター フリーアナウンサー 小野寺 彰子 氏

第2部「頑張る姿で伝えられること」13：00～13：45

俳優 富田 望生 氏（いわき市出身）

フリーアナウンサー 小野寺 彰子 氏



3.11 メモリアルイベント (2024) 2024.3.11 @東日本大震災・原子力災害伝承館 紐のての底

震災当時のこと

長崎で放射線の専門医
福島に行かなければ...!

正確な中、土の採集をしていた。

高1で学校は休み、こつて被災

死ぬかもしらない

みなさんの体験・記録・思いが伝承館の財産になります!

母に電話がなかなかつながらず不安だっ

母帰宅。

避難場が流されてしまう。

ラジオも使っていた。

ラジオの現場も混乱していたが、必死に情報発信していました。

逃げても父の存在に感謝

体力がキツイからここに残る。

神楽川へ避難

祖父母とは離れることに。

もう高校なんて行けないだろうな。

1か月はバイト

心配するな。父の言葉が高校行け!

今の道へ。

川内村のここが好き!!

美しい田園風景

水がおいしい!! 天然の地下水

ワインもおいしい!

(産業交流センターでも買えます)

人のあたたかさ

家族のようなつながり

SNSの時代。不確定な情報が多い今だからこそ、伝承館から正しい情報を得てほしい! 自分も発信がんばります!

今の自分がいるのは、両親の励まし人の温かさのおかげ!

トークセッション 第1部
「家族との絆・支え合うこと」

モデレーター 小野寺 彰子氏
伝承館館長 高村 昇氏
俳優 横田 龍儀氏

3.11 メモリアルイベント (2024) 2024.3.11 @東日本大震災・原子力災害伝承館 紐のての底

3.11は金曜日だった。当時は小学5年生。

学校でお楽しみ会の準備中だった。

今までにない揺れ

必死に机の下に。

バイトのないジエットコースターのおよ

あんながしかりしないで誰がばあちゃん守んのよ!!

先生の言葉に奮い立たされた。

地元みんなが応援しています!

地震発生後

曾祖母と、隣の家に身をよせて母の帰りを待た。

ろくにくをつけては消し... 深い眠り

母が経営するホテルで避難生活

コミュニティに助けられた。

原発事故...

行きたくない!! 行ってやるな!!

いけさを出すことに。

東京で芸能の養成所に。

いけさのみんなが見てくるとかもしれない...!

がんばれ。応援するよ。

デビュー。いけさでの舞台挨拶

この日はこの出会いのためにいけさを出る運命だった。応援しあってくれ!

人生を大切にしてくれるチームと出会い

俳優の道へ!

俳優・私だからこそできること

福島を伝えること... 迷いや葛藤もあつけど、伝えられる立場であることを活かして1人でも多くの人に発信し続けていきたい。

望生ちゃん、がんばれよ! がんばれ...!!

地元の人々の応援

古里のあたたかさ

色々な感情を代弁する俳優に!

トークセッション 第2部
「頑張る姿で伝えられること」

モデレーター 小野寺 彰子氏
俳優 富田 望生氏

<追悼イベント>

14：00～	チェルレウム・マーレ 声楽アンサンブルコンサート 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階エントランスホール
15：30～	台北フィルハーモニー管弦楽団 弦楽四重奏コンサート 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階エントランスホール
17：00～	音楽と語りによる フクシマの伝承と未来～請戸小学校物語～朗読&コンサート公演 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階エントランスホール
18：00～	追悼花火 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 屋外

<関連イベント>

- (1) 3. 11ふくしま追悼復興記念行事 キャンドルナイト
日時：令和6年3月11日（月）
17：00～19：30
場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 アーカイブ広場
- (2) ただいま おかえり双葉町キャンドルナイト
日時：令和6年3月10日（日）・11日（月）
17：30～20：00
場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 アーカイブ広場
- (3) 双葉町産業交流センター3. 11特別企画展「ふたば、ふたたび☆想いを
つなぐ写真展2024」
日時：令和6年3月1日（金）～31日（日）
場所：双葉町産業交流センター1階エントランスホール





キャンドルナイト



追悼花火

2 節 広報

1. イベント出展

伝承館を広く多くの方に知っていただくとともに、福島の「今」について正しい情報を発信するため、県内外の防災イベント・風評払拭イベントに出展した。

- ・「東京国際消防防災展」(R5. 6. 15～6. 18 東京ビッグサイト)
- ・「ふくしまフェスタ in ららぽーと豊洲」(R5. 7. 22)
- ・「ぼうさいこくたい 2023」(R5. 9. 17～18 横浜国立大学)
- ・「そなえるふくしま 2023」(R5. 9. 23 ビッグパレットふくしま)
- ・神田外語大学学園祭 (R5. 10. 21～10. 22)

福島県と連携協定を結んでいる神田外語大学の学園祭に出展。同学は伝承館を学生の探求学習に活用している。

- ・「チャレンジふくしまフォーラム in 長崎」(R5. 12. 1)

福島県広報課が主催するイベントに高村館長が登壇、伝承館パネル展示。

- ・「ふくしまフェスタ in ららぽーと横浜」(R6. 2. 17)

2. 情報発信

- (1) 企画展やイベント、来館 20 万人到達時など積極的にプレスリリースを行い、報道機関の取材につなげている。令和 5 年度は 31 本発表。
- (2) 伝承館ホームページにより、各種イベントや語り部講演、研修等の事業についてきめ細かに発信するとともに、SNS を活用した情報発信を計 547 回実施した。

3. プロスポーツチームや観光施設との連携

- (1) いわき FC と連携したホームゲーム観戦チケットによる入館料割引（令和5年4月～）
- (2) アクアマリンふくしまと入館料相互割引（令和5年7月～）
- (3) Jヴィレッジと相互優待（令和5年8月～）
- (4) 福島ファイヤーボンズと連携し入館料割引（令和5年8月～）



来館者 20 万人到達



足立梨花さん来館

8章 東日本大震災・原子力災害伝承館の 運営に関する有識者懇談会

1節 東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会

伝承館が掲げる基本理念を着実に実現するとともに、伝承館のより良い管理運営と良質なサービス提供を図るため、地元及び各分野の専門的な見地からの意見や助言を得ることを目的として、「東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会」を令和3年3月に設置している。

また、伝承館の調査・研究事業の質の確保・向上を図るため、専門的な見地からの意見助言を得ることを目的として、令和5年3月に有識者懇談会に調査・研究専門部会を設置している。

1. 令和5年度の開催

令和5年度から有識者懇談会を事業年度終了後に開催することとした（令和6年5月23日（木）に開催予定）。

調査・研究専門部会を令和6年3月27日（水）に催した。（P.67-68に記載）

2. 懇談会委員構成

（令和6年4月1日現在）

所属・職	氏名	備考
福島大学共生システム理工学類 客員教授	小沢 喜仁	学識経験者
福島大学共生システム理工学類 教授	川崎 興太	学識経験者
福島大学教育推進機構 准教授	前川 直哉	学識経験者
双葉町長	伊澤 史朗	地元代表
NPO法人富岡町3.11を語る会 代表	青木 淑子	地元代表
福島県教育委員会 教育次長	箱崎 兼一	教育関係者
福島県観光物産交流協会 理事長	守岡 文浩	教育旅行/研修関係者
福島民報社（常務取締役郡山本社代表）	鞍田 炎	その他（報道）
福島民友新聞社（取締役郡山総支社長）	小野 広司	その他（報道）
クラシノガッコウ月とみかん 代表	大場 美奈	地元代表

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に 関連した新聞記事

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

令和5年度、東日本大震災・原子力災害伝承館の活動は、新聞社等に多数取り上げられました。新聞社に取り上げられた東日本大震災・原子力災害伝承館に係っている新聞記事を抜粋し、一覧として紹介します。

また、東日本大震災・原子力災害伝承館の活動のうち、新聞社から許可を得た記事の写しを紹介します。※掲載記事見出し（または概要）に○を付した新聞記事（WEB版では省略）

（4月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
4	1	土	福島民報	3	復興庁 被災4県の伝承施設紹介
4	1	土	福島民友	3	震災伝承施設ガイド 復興庁が作製、配布
4	6	木	福島民報	3	2022年度の来館者開館以降最多に 双葉の伝承館
4	6	木	福島民友	1	○伝承館、最多8万人来館
4	10	月	福島民報	1	持続可能な伝承模索
4	13	木	福島民報	2	いわきFC戦見て本県復興も応援
4	13	木	福島民友	3	いわきFCチケット提示 伝承館の入場料2割引
4	14	金	福島民報	2	処理水「高い透明性で」独環境相、双葉や浪江視察
4	14	金	福島民友	3	ドイツ環境相が双葉と浪江視察
4	16	日	福島民報	3	○エフレイの将来像探る
4	18	火	福島民友	13	災害伝承館8万人来館
4	20	木	情報ナビ たいむ		はまだより「浜通りが好き」
4	22	土	福島民報	1	双葉再生 新たな一歩
4	22	土	福島民友 別刷	8	双葉町 東日本大震災・原子力災害伝承館
4	23	日	福島民報	19	双葉町と人 紡ぐ場
4	29	土	福島民報	27	避難住民結ぶ みこし巡行

（5月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
5	6	土	福島民報 相 双版	10	震災の影響 肌で感じる
5	9	火	福島民報	10	放射線被ばく、復興学ぼう
5	9	火	福島民友	3	伝承館、講座参加者を募集
5	10	水	福島民報	1	鉄道で復興ツーリズム
5	13	土	福島民報	27	常磐線沿線で舞台芸術祭

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

5	13	土	福島民友	26	常磐線芸術祭プログラム 22 の演劇や音楽
5	17	水	ドイツ誌		環境相福島訪問
5	20	土	福島民友	10	浪江と富岡のパネル展
5	25	木	福島民報	15	富岡、浪江両町の復興の歩み紹介 伝承館でパネル展
5	25	木	福島民友	21	○東日本大震災・原子力災害伝承館「浪江町・富岡町パネル展」
5	26	金	福島民報	3	池上彰さん講師に相双地方取材
5	26	金	福島民友	3	8月ジャーナリストスクール
5	29	月	福島民友	1	震災「伝承」VRで発信

(6月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し(または概要)
6	1	木	情報ナビ たいむ		はまだより「台風」
6	10	土	福島民報	3	双葉の震災・原子力災害伝承館 来館者 20万人突破
6	10	土	福島民友	3	○伝承館、来場 20万人突破
6	20	火	福島民友	4	○高村伝承館長が放射線解説
6	27	火	福島民報	13	○短冊に復興願う
6	27	火	福島民友	21	なみえ創和小児童が伝承館を訪れ、短冊を飾り付け
6	29	木	福島民友	22	双葉で復興の歩み確認

(7月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し(または概要)
7	5	水	福島民友	4	原発や伝承館を視察 ミスギャラクシー出場者ら
7	6	木	福島民報	13	浜通りの復興状況理解 ミスコンファイナリストら
7	8	土	福島民友	3	復興旅行拡大へ 周遊バス試行
7	12	水	福島民友	10	○飯館の歩み パネル展に
7	13	木	福島民報	14	原発事故風化防止へ
7	13	木	福島民報	14	入場券で割引 災害伝承館とアクアマリン
7	13	木	福島民友	22	アクアマリン×伝承館 相互入館で割引
7	15	土	福島民報	3	○原発事故直後の緊迫伝える
7	15	土	福島民友	3	実物資料やパネル 原子力災害伝える
7	16	日	福島民報	2	県が周遊バス試験運行
7	16	日	福島民友	2	○伝承館や震災遺構巡る
7	28	金	福島民報	13	○災害の仕組み理解

(8月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し(または概要)
8	2	水	福島民報	17	復興の取組み理解 日英の高校生が浜通り訪問

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

8	3	木	福島民友	3	Jヴィレッジと伝承館周遊優遇
8	3	木	福島民友	4	請戸の記憶 音楽劇に
8	6	日	福島民報	3	○双葉に響く鎮魂の歌声
8	6	日	福島民友	26	被災の記憶 詩や合唱
8	6	日	福島民報	11	復興の現状 理解深める
8	10	木	福島民友	1	ホープツーリズム定着へ正念場
8	10	木	福島民報	13	復興の歩み・地域課題学ぶ
8	11	金	毎日新聞		東日本大震災を知らない子どもたちへ 請戸小の構成劇、12日上演
8	13	日	福島民報	12	音と語りで請戸小物語伝承
8	13	日	福島民友	2	請戸小の教訓を伝承
8	27	日	福島民報	11	浪江の「南津島の田植踊」
8	27	日	福島民報	4	迷惑電話で対応要求
8	27	日	福島民友	22	伝統田植踊 浪江に継承
8	27	日	福島民友		中国発 県内に迷惑電話
8	30	水	北海道新聞	6	○震災の記憶どう伝える

(9月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し(または概要)
9	4	月	福島民友	2	大東大生 風評考える
9	19	火	福島民友	3	伝承館来館累計 22万人
9	22	金	福島民友	3	○ウクライナ人留学生被災地の現状を学ぶ

(10月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し(または概要)
10	4	水	福島民報	3	○双葉の伝承館 神戸で出張展
10	4	水	福島民友	3	伝承館、神戸で出張展
10	15	日	福島民友	4	伝承や復興、意見交換
10	15	日	福島民友	5	教訓共有し次の被害減らせ
10	20	金	福島民報	3	双葉町題材に映像制作
10	22	日	福島民友	19	神田外語大で本県復興紹介

(11月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し(または概要)
11	2	木	福島民報	25	震災の記憶 継承急げ
11	6	月	福島民報	20	福島の教訓、神戸で発信
11	12	日	福島民報	13	被災地巡り現状理解 復興庁県外の中高生招く
11	16	木	福島民報	1	○復興の歩み 理解深める
11	16	木	福島民友	3	本県復興「確実に前進」

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

11	17	金	福島民友	22	被災ピアノ 26 日演奏会
11	22	水	福島民報	13	11 人の震災体験を公開
11	22	水	福島民友	3	○震災伝承へ課題共有
11	23	木	福島民報	3	○研究活動の成果報告 原子力災害伝承館の高村館長ら知事訪問
11	24	金	福島民報	1	県、万博に単独ブース

(12月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
12	10	日	福島民報	15	請戸小児童の避難描く
12	10	日	福島民友	21	演劇で伝える「福島の今」
12	13	水	福島民友	9	避難民の心情演じる
12	15	金	福島民報	9	来館者 25 万人突破 双葉の伝承館
12	15	金	福島民友	5	○伝承館来館者 25 万人達成
12	16	土	福島民友	3	浪江、全 12 地区 710 ヘクタール除染
12	16	土	福島民友	2	原発事故費用 23 兆円に

(1月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
1	12	金	福島民報	17	選手ら被災地を視察 勇気届けるプレーを決意
1	15	月	福島民報	2	○「震災被害と教訓語り継ぐ」
1	15	月	福島民友	4	災害の教訓伝え続ける
1	22	月	福島民報	2	○震災と復興の研究発表
1	22	月	福島民友	2	石川さん石井さん最優秀 伝承館「福島学」復興研究の成果発表
1	22	月	福島民報	2	高校生や大学生らが処理水の伝え方議論
1	22	月	福島民友	2	○処理水情報発信巡り長崎大生ら意見交換
1	29	月	福島民報	9	○県出身俳優の体験紹介
1	29	月	福島民友	5	伝承館 1 日から出張展

(2月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
2	2	金	福島民友	4	○「次世代が経験語り継ぐ」
2	5	月	福島民報	18	○震災・原子力災害伝承館常任研究員葛西優香さんに聞く
2	11	日	福島民報	7	○被災者の思い考える場に
2	14	水	福島民友	3	伝承館、3.11 イベント
2	15	木	福島民報	20	双葉郵便局 来月 7 日営業再開
2	15	木	福島民報	18	フィールドパートナー
2	29	木	福島民報	3	台湾の教育関係者来県 被災地の復興や現状視察

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

(3月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し(または概要)
3	1	金	福島民友	10	○伝承館内3カ所常設展示を更新
3	5	火	福島民友	5	伝承館 初の海外展示
3	8	金	福島民報 相 双 版	10	和楽器と劇で教訓伝承
3	8	金	福島民報	11	3.11 未来と現状
3	10	日	福島民友	5	次世代と課題考える契機に
3	10	日	福島民報	17	復興への思い胸に戦う
3	12	火	福島民友	2	○「あの日」語り継ぐ
3	12	火	福島民報	3	災害体験伝え続ける決意 俳優2人、切々と
3	13	水	福島民報 相 双 版		鎮魂の思い届いて
3	21	木	福島民報	2	○被災地の盆踊り 継承へパネル展

冊子版では、このあと87ページから107ページにかけて新聞記事が掲載されていますが、WEB版では、著作権の関係で該当ページを削除しております。ご了承ください。

東日本大震災・原子力災害伝承館 令和5年度 年次報告書

令和6年9月 発行

■発行 公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構
東日本大震災・原子力災害伝承館
〒979-1401 福島県双葉郡双葉町大字中野字高田 39
T E L : 0240-23-4402
F A X : 0240-23-4403
e-mail : archive@fipo.or.jp
W E B : <https://www.fipo.or.jp/lore/>

■印刷 株式会社山川印刷所

© The Fukushima Innovation Coast Promotion Organization 2024 Printed in Japan

*無断転載を禁じます。

<p>公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構の取組みは 以下のURLからご覧いただけます。 https://www.fipo.or.jp/</p>
--